婦人と子ども

第七卷

第八號

一香

第七卷第八號

目次

卷首挿畫　歐洲最近の幼稚園
夏季雜吟　鹽野奇零
野の鳥と親心　川口孫次郎
幼稚園へ子供を入れるに就いて　東基吉
金錢に對する觀念　佐治實然
フレーベルの子守歌　孤蓬生
印度の婦人　ミス、シング
小兒の精神過勞　アルフレッド、チユルニー
寄生虫病　新免義男
氣風　牧羊
箕作文學博士の家庭　門下生
料理　石井泰次郎
夏の雨後　孤蓬生
かくれた金貨　よし子
豆と石　乙女

投稿募集

一種類
- ●おゝ伽話　本誌半ヶ年分以上三ヶ年分選擇の上本誌に載錄せるものは内規により原稿料を呈す
- ●一般記事

但し右賞品は受賞者の希望に依りて會費と差引き若しくは自ら取らずして其指定する人に本會より直接送ることを得

一注意　短歌は隨意の用紙にて可なれどお伽話及一般記事は一行廿二字詰にて半紙又は罫紙に書かれたし原稿は凡て返戻致しません此募集は期限を定めません毎月十日迄の分を其月に選評し後は翌月に回はし何時迄も引續いて行く積りです。

宛名は本會へ直接御送り下さい。

開き封で應募原稿と標記すれば三十匁迄は郵税二錢で參ります。

質問規定

本會は讀者の種々なる質問に應じます。婦人と子供と家庭とに關する事なら何でもお尋ねなさい。往復はがきか又は通信料封入ならば早速に御答します。公衆に有益だと思ふことは誌上で説明します。

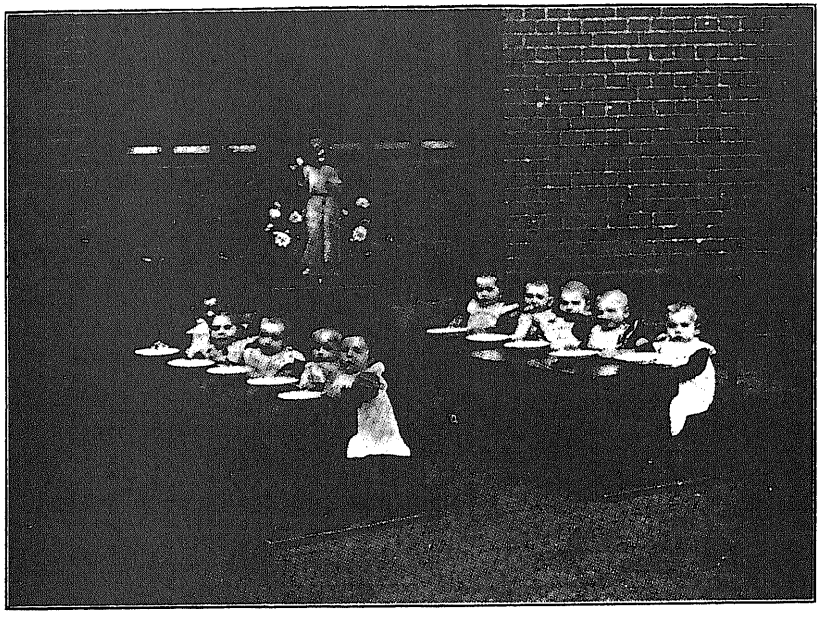
入會又ハ購讀手續

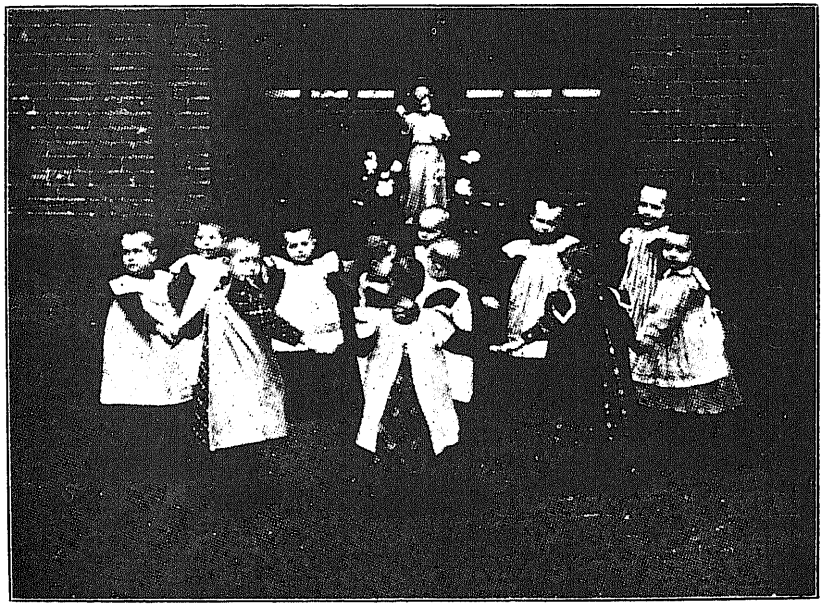
本會に御入會なさらうとする方は會費一ヶ月金拾錢の割合で一ヶ年分をまとめて本會に直接御申込下されば直に登錄して雜誌を發送致します。會員にならずに雜誌丈け讀みたい方は左の割合の前金で本會か又は賣捌書店へ御便宜御申込下さい

一册郵税共金拾一錢　●六册前金郵税共六拾錢

●拾二册同金壹圓貳拾錢　●郵券代用一割增

獨國伯林に於ける幼稚園





第七卷第八號

夏季雜吟

鹽野奇零

百味にもまさる峠の清水かな
涼しさや滝の雫に袖ぬれて
音聞きて涼くなりぬ岩清水
風の外聞くものなし閑古鳥
松風の音に疊みぬ白扇
流し行く筏の上や夏の月
山を降る雨に戯ぐや釣しのぶ
明安き夜を惜しみぬ夏の月
起されて雨の跡見る蚊帳かな
眠りたる子の手から飛ぶ螢かな
風薫る家やこの世の外らしき
二階から出舟を呼ぶや夏の月
よき風によき唄出たり田草取
峠越する同者の笠や蟬時雨
待つ雪のよき程降りて青田かな
人去れば又來る鳥や岩清水
道暮れて水に明るき螢かな
魚河岸に物のにほひや日の盛り

野の鳥と親心

川口孫次郎

雉です！銃砲を！といふ家僕の叫が茲に二十有一年始終吾輩の腦裏に深く刻まれて益明瞭になつて來る。

幕府の禁制弛みて以來、引續きての濫獵に今は自然のまゝに棲へる鶴は内地では殆んど見られなくなつた唯雉丈は尙族滅の悲運には陷らないで殊に狩獵法の發布せられしこの方、幸に春曉霞の中から、ケン〳〵の聲を聽くことが出來る。

元來、雉は割合に人近い鳥である。山中に棲んでは居れど。食物は蟲や柴の實の外は穀食殊に豆食をやつて居る。從つて折があらば人の植付けた山裾の畑又は人里近くの畠に漁りに出てくる。其巣搆へも矢張り山際や谷底の平な叢の中にする、稀には人の栽培して居る蠶豆の畑の中を好適の地と見定めて產卵する。彼は他の鳥とは趣が異つて蛇の襲擊を毫頭懸念しない寧ろ歡迎する方であるから、產み場所に付ては割合に放膽である。殊に卵を暖むる雌の羽毛が淡き茶褐色であるから、叢の中に轉つて居つては一寸人目には識別がつきにくい、殊に例の子思ひの爲に中々容易に立ない。それ故に目敏い人間に先ぜられて半天て押へられたり草刈籠でふせられたりして生擒せらるゝことさへ少くないが、此方がボンヤリな人間であると爪先きに尾羽を踏みながら知らずに行き過ぐることもないではない。

思ひ起せば廿一ヶ年のその昔、頃は卯月の上旬の或朝、吾輩の家の僕が、呼吸せき切つて歸り來つて雉です　鐵砲を！と乞ふ。我が父は微笑しながら怪我をするなといつて貸與した、吾輩は小供心に好奇の念に堪へないで、其後の消息を一刻千

秋の思ひで待ちに待つた。程經つて彼僕は力なげに銃を肩にしたまゝブラリと素手で歸つて來た。吾輩はいたく失望したが、我父は「雉にうたれなんだが幸であつた」などと笑つて居られた。彼僕は面目なげに勝手の方に行つて、我母に訴ふるが如く述懷をして居る聞けば……今朝命によつて向ふの山際に行つて躑躅と卯の花とを折りとらむと灌佛の節に立つべき……枝に手をかけた其刹那に足下から雷が宙に飛び昇つたやうな爆裂がしたので腰を拔かして其塲にドシンと座つてしまつた、扨心付いて觀れば、コレは〳〵矮鷄の卵のやうなのが、しかも十有二個、待て〳〵雉であつた〳〵雉てあるから雌鳥が頓がて歸つて來るに相違ないならばそれをも、と早速駈け歸つて用意の獵銃拜借し、携えて先の塲所近くに折返し、銃口向けて窺ひよれば、居るわ〳〵雌鳥は早や歸り來つて、射てといはぬばかりに横になつて居る。オヤ〳〵雄鳥も來て居るやうす、ほんに美しい、重々の上首尾、少々慾張りすぎるかは知れねど序にあれをも併せて、一發二羽を射留めやうと、狙を定めやうとすれど、的が程よく二重にならぬ、右へ寄り左に動く、動くも道理、卵を盡く兩翼に抱えて横はりし雌の頭部をば雄が啣みて曳き去るのであつた。氣付いてからは急に氣の毒な感が起り、何んだか空恐ろしくて、其儘歸つて來ました云々といふ話。我母は切に之に賛成して、燒野の雉、夜の鶴、山が燒るがたゝぬは雉よ、此處がたゝりよか子をおいて、などといつてきかせて、よくてそと褒めてやつて居るやうす、傍に女中もホンにそうと大賛成をして居つた。

之は吾輩が動物の所作に趣味を感じた第一歩であつた。路の邊の草花をめでたり、山里の木立にあこがれて居る間にも一方に、それ等に消息せる禽や獸にも多くの注意を拂うやうになつて來た。

○鳩に三枝の禮ありといはれて居るけれど、何分此鳥の野生のは人を恐るゝことが甚しいので今日

までの吾輩の實驗では分明しない。併し宿る所は勿論大体定まつて居るやうだが、枝に上下の別はあれど、傳ふるものゝ說の如くに親子の關係を示せるか否かはトント分らぬ。若し三枝を下つて宿るとせば、日本式にいへば雌か雄に對してか、或は亞米利加式に雄が雌に對してか、多分鳩は普通の日本人よりはハイカラ式で米式に宿るのでありさうに吾輩は觀察して居る。此鳥は產卵數が二つである、それがきつと雌と雄とである。鴛鴦のそれのやうだ、しかも人に見付けられたと感付くと卵を可愛ゆく思はないのか其後巢に出入しなくなる。

○烏に反哺の孝ありといふのも未だ確かでない。兎に角七月末頃迄には彼等は異樣な鳴聲で哀れつぽく五六日鳴きつゞけて親子の分袂をすることは事實である。其以前に或は子が親に哺くむのではあるまいかと思はるゝ樣子も見ゆる、が之は大方此方から迎へて見るからでありさうだ。卵は大底二つ。

○鳶は深山の大樹か森の老木かに巢う。現今では保護鳥たることは無論であるが、往年余の隣家の大將が攀ぢ登つて地上十七八間もある巢のところに達した、親鳥は爪を尖らし嘴を鳴らして蹴りに來たにも拘らず、大將は登るし、樹下では別に一隊の腕白連が手に〳〵旗をふり石油罐を敲く、わめく、叫ぶ、逐ひたつる。流石の鳶も之が爲に大將には近よらなかつた。その隙に例の大將が下を向いての報告に「眼の球のデカイ奴が之れッ丈」といつて頸筋を摘んで、さし出して下の後援隊に見せたのは二羽であつた。ヒーと其小供が叫んだ。之には大將も突然のことであつたので聊か驚いた親鳥も聲さゝつけてヒューと羽風を切て翔けつて來た。下からは鯨波が沸く大將は小供を捕つても仕方がないから、ゆるしてやるといつて、もとの巢の中に入れてふいて、復た雨蛙同樣に幹に抱きついてそろ〳〵降りて來た。今から考ふれば實に

無鐵砲極まることであつた。よくも眼をつぶされなかつた、顏をかきむしられなかつたのだ、併し、鳥せゝりは矢張り鳥せゝりをするものと見えて、現に其大將は過る三四年前から、日本兵士二百人ばかりの大將で、滿洲の奥に鷲い巢をせゝりに行つて居つた。

水鷄や鷸は其棲家が水邊であるから其巢も水際につくる。鴉のやうに浮巢ではない、大低眞菰の中である、稀には菖蒲や葦萩の中に搆ふることもある。前者は卵が比較的に小さくて巢の作りが粗末で高い、卵の數は五六個が通常であるが、後者は巢の造りが大きくて用材も粗い、ズッと葦間菰間に通路が出來て居るから道さへ見付けたら巢の在家が直ぐわかる。卵の數は多いのが十個十二個ある。始めて巢掃をした時に人に見付けられたと感付かば其巢を見捨つるが、愈産卵してから後であると、多數の卵の中から一個や二個を盜まれても平氣で暖めて居る。三週間足らずで、火口の塊のやうな眞黑なムク〳〵な小供が孵化する。二時間も經てば其雛は早や巢を出て自由に游ぐ、敵に追はるゝと直ぐ水に潜ぐる。久しく浮ばないがと訝つて見て居ると此方が間抜だ。奴さんも沈んだまゝで久くは我慢が出來ないと見えて、直ぐ向ふ水藻の間から水の表面に鼻の先丈を出して人を馬鹿にして居る。そこで今度は此方から其鼻の先きを一寸三本の指で摘んで失敬しやうなら、何んでもない容易いことだが、失敬したからとて人手では青ちにくいから見逃かしてやる。尤も親鳥は此際キョッ〳〵と稍隔つたところで小言をいつて居る。雉の子供も之とよく似て居る、茶褐の虎斑のやうな奴さん、轉がるやうに逃ぐるが絶對絶命かなはない時には、草の中でも木の葉の間でも所謂頭丈隱くして小丸い尻つぽホッたてゝ、隱れ得たりとすまして居る、可愛いものだ。それをソロッと手で握ると、小供ながらも眼をつぶつてズーと脚を伸ばして硬直狀態をなす、これ〳〵は握

り方がきつかつたので絶息してシャクばつたのであるまいかと、手をゆるめたら最期、コロリと轉がり落ちて、一目散に駈け出して逃げてしまう。彼處で親鳥はコッ〳〵と呼んで居る。

ボンノー（又葦五位といふ）は浮世が厭になつたとかで電信線に首をひつかけて死んでゐたといふ話、は堀や澤の多い地方でよく耳にすることだが、余は敢て其事實の保證人にはたゝぬ。但し此鳥は少々薄ノロである、天保通寶以下である。菰や萩の間に巣ふが、愛情もあの顔付通りで、ヌーとして子供を左程かあいともさりとて又憎いともなしといふ調子、粘液質の鳥だ。

卵の保護に關して一層無責任のやうなのが川千鳥だ、礫の色と似た親鳥が礫の間に身を容ゝる丈に巣を造くる、造るといつたとて何の設備もしやしない唯礫を押のける丈のことだ。其處へ生み放して時々來て暖める、上からも横からも掩蔽物かない全くの蒼天井の下だ、卵の色も其斑點も丸で石と同樣だ。

之に反して尾長鳥の巣は樹上に拵て居る上向きのもゝ中で一番深い者のやうだ、丸で壺のやうだ。枝の間、蔽ひのある、往々蔦などの葉がくれを利用して高い處に組んで居る。卵は六個が多い中だ。

掠鳥と等しく敵が近寄ると親鳥がギャア〳〵いふ

最も神經過敏なは鶯だ。其巣はコンモリとした例へは茶の樹や笹藪の中に拵へらるゝ。細き木の根を外部に、小笹の葉をその次に、内部は細かい綠苔でチンマリと丸めて、横から出入するやうになつて居る。容易に發見が出來ない。卵は五つが通例のやうだ。產卵してから後でも人に發見せられて一寸でも卵に觸れられたら、早速見捨てゝしまう。一体にどんな呑氣な鳥でも巣をいちられたら大抵來なくなるが此鳥は一寸指がふれても覺るやうだ。

四十雀仲間は、横向きに巣を吊るのが通例であつたが、大抵は木のウツロを利用するやうに近頃

傾いて來た、十年前の彼等より昨今の彼等の方が明治の盛運につれて、中々便利法をやり居るやうだ。人に用心するやうでしないやうで、トンと呼吸がとりにくい鳥だ。尤も山雀丈は深山育ちであるにも拘らず、非常に早く人に慣る丶。

○翡翠は、明かに人に警戒して可成近よらないやう可成見付けられまじとする有樣があり〳〵見透く。彼は巣に入るにも、先づ少し隔つた枝にとまつて四邊を見すまし、人氣のないのを確かめた上でなくては、飛び込まない。勿論之は巣の構造が他の鳥と趣を異にして居るからでもあらう。彼の巣は土の穴だ、堤などの崩れ　順次下方に引けて殺げたところで、毒虫も蛇も這入ることの出來ないとこに、横から拳小の口を堀り開けて暫くは奥上りに頓がて其奥に大きく丸く堀り下げてそこを巣として居る、無論何物も敷いてはゐない、唯其土窟の碗のやうな凹みに產卵する。子供が萬一人手に落つるやうな不運に遇つてもふり向きもしない、知らぬ顏の半兵工である。自身の用心深といふよりは愛情が乏しいといふ方が至當のやうだ。論より證據、あの奇麗な服裝をしてゐながら家庭の不潔といつたら、たまらない。他の小鳥は皆子供の排泄物をばくわへて遠く運んで他の處へ捨つるが、此鳥は一度もそんな面倒を見ない。それ故に子供等は巣の中から玄關口に尻を向けて、發射して用便をして居る。彼等は肉食だから脫糞は發射すべく適當に白き液体より成立つて居るのだ。吾輩も現に反射鏡を携えて行つて、巣内の彼等の生活の狀態を窺はうとした際、何んだか子供か尻を此方に向けてモヂ〳〵ふつてゐるから、これはおかしいと思つて居る刹那、シタ丶か一發、危いところを負傷するのであつた。どうも失敬な奴だと非常に癪に障つたけれど、君子自重と自から制しておいたをがあつた。

○河原ヒワは割合にコスイ鳥だ、小さな形をしてゐながら高い高い枝に巣ふ、大底は苦造り、卵は

六個が關の山、百舌鳥は割合にあつかましい、手近いところに巣ふ、其搆造も至つて無造作である。でも稀には人に見付けられた以來、卵を捨てゝ二度と來ないものもある。實地に目擊するところによれば大抵の小鳥は、巣の邊に、蛞蝓や蝸牛の何物かを利用してゐるやうだ、之は確に彼等にとりて蛇の襲擊を防ぐつもりであるらしい。

杜鵑は他の鳥の巣に一個づつ生み落して、他の力に俟つて巳の種族を維持し行くのみで、絶えて自から巣くはない、掬養しない、と人はいふけれど之は實際に證據がないから、うそともほんとともいへない。吾輩の寡見なる、實地に未だ一度も見たことがない、あれは多分机の上でいふことだらふ。

頰白は大抵あまり高くない木の枝に巣ふ。が又岸や崖に棚をつくつて丁度枝垂れ陰になつたところにも巣ふ。造作は鶯ほどに巧妙でないけれど、内部を棕梠でかゞつたあたりは百舌鳥などよりは遙に精巧である。若し敵に子を奪はれさうになると非常に狂奔する。愈奪はれてしまうと、悄然として其近傍を徘徊する有樣が誠に可哀想だ。ヒヨツとチ、てふ我子の聲に似た響でもしようものなら何處までもついてくる。尤も山奥ので、平生あまり人を見なれないものであると、自然人を怖れて子を無造作に見捨つることがある。

雲雀は一切土を堀つて巣ふが、餘程工合をよくして居るので蛇など其上をスーと通りこしても分らないやう、子供等にも敎育をして居る、愛情は前の頰白より一層厚い。若し其子が人の爲に捕はれて、籠の中でチョ〳〵呼べば、親鳥は籠の在所に從つてきて、其子が大人になるまで始終虫をくわへて來て養育する。一朝其子が居なくなると雄鳥も歌はなくなる。

或年の舊の五月、麥の刈り跡に例の巣が殘されて居つた。中に卵が唯二つ……通例ならば五個か六個なるべけれど……之は多分二番子か三番子く

らぬの産み始めであるに違いない、隨分季節に後れた方であつたのだ。今日愈鋤さかへして水田にするといふ。致方がないから、せめて卵丈なりとも救つてみばやと思つて、余は携え歸つて其一顆をは隣の老婆の家の燕の巣に入れた、余は此時意外の思をしたのは燕の卵と雲雀のそれとは其大さが非常の差があることであつた。心して親鳥の大さをよく〳〵比較してみると何でもないことであつたが、一時は思の外の心地がした。他の一顆を宅の離家の軒なる雀の巣の中に入れておいた、卵は矢張雀のよりも大きい、一週間許見て居ると何れの親鳥も熱心に暖めて居るやうであつた。八日目と思ふに、隣の家の燕の巣に梯をしてみると雲雀丈が愈孵化して居る、早速歸つて宅の雀の巣を見ると、等しく雲雀一匹丈は化して居る。翌日再び燕の巣を見ると昨日見た雲雀の子外に主人燕君の子供も二人孵化して居つた、形は非常に小さい雲雀の兒は産毛か立つて首を上げて黄色の口を開くけれど、燕のは首をゴロ〳〵しながら未だ眼を開いてゐない、全くの赤ん坊だ。同時に宅の雀の城では矢張雲雀のみで未だ他に一つも孵化して居らなかつた。

其後は毎日双方へ、日參と云ふ有樣、五日目にやう〳〵雀のホントの兒も殼を脱し始めたゝで、巣の中が賑かになつた、丁度大砲の傍へ玉椿などが押し出して居るやうに。

六日目に、隣の婆さんが掌に何かを載せて、當惑したやうな顔付で、唯今到頭燕の親が此子を巣からくはへ出しました。幸に下が糠桶であつたので生命には別條がありませんでしたが、といひながら我輩の前に持つて來てくれた。見れば繼子の雲雀だ。燕夫人つれなくも投げ出しをかましたと見ゆる。流石に吾輩も大に弱つた。併し窮すれば通ずとやら、試みに其夕方はの暗闇を利用して、彼雛を掌にのせて、重々の御危介甚だ以て申上兼ぬる儀には、とは口の中、先づ〳〵　例の雀の寢

室にソッと入れて生え付きの子供及び繼子一人の間に、又一人繼子を、依頼しておいた。雀の巣の中は全くの養育院同樣となつた。

翌日學校に稽古に行く前、さては學校から歸つて後、先生からいひ付けられた復習などは當分入れ掛ともいふべき有樣、熱心に雀の行動に注目して居ると、雀公、形は小さくとも大頭なものだ。平氣で平等に世話をして居る。全体近頃の利發な人間は目先き利いて丸で燕式だ。他人の子まで重々背負ひ込んで、汗水垂して養育するなとは決してしない。イヤそんなことをしやうものなら頓馬の標本として嘲けらるゝのが通例のやうだ。が幼兒を助けなどして他人の母に向つて生みの母と思つて其罪なき紅の口を開けて、チョ〳〵と食を求むる。誰か一掬の涙なからんやだ。そこのところを雀は能く要領を得で居る。斯くの如くにして到頭二羽の雲雀の繼子等も繼母雀夫人の手にその生みの五人の子供等と共に仲よく成長した。

唯惜しいことには巣立ちの時に至つて、雲雀の子供等二人は樹の枝に一寸とまりかねて地上に落ちた。之が爲に其一羽が脚部の骨折で不治の難症にかゝつて、吾輩の心ぱいの手當も其甲斐なく豫後不良で、聲をもたてずに天國に昇つて終つた。跡に殘つた一羽、之はよく〳〵の生命冥加のあつたものと見え、我輩が捌き筆の先きで差出して與ふる摺餌を珍重がつて、やうやう出來上りかけた羽を搖つて食べる。吾輩の留守中は、内の女中が心配をしてくれて、臨時養育係として時々例の筆先で世話をしてやることになつてゐたが、それも程なく必要がなくなつて彼は獨りで摺餌を不機用なからやるやうになつて、頓がて一人前の前途の有望な音樂家、少くとも音樂學校助教授位には惜しいといはるゝまでになつた。

母の忠告によつて、吾輩は彼を檜舞臺に出すべく籠から開放した。

どうしても戻つて來る。來れば例の籠の上にとま

つて、頻りと内を窮つて居る。あまりしはらしいから試みに入口を開けてやると、悦んで籠の内に踊り入る、入つて終へば扨安心といふ面持、何時開けてやつても一寸外出しても直ぐ復た歸宅するその時入口が閉ぢて居ると小言をいふ。「蒼空を我吻顔に雲雀かな、」とは果敢なき虚榮の夢よ、外には百舌鳥あり鷹あり烏あり、寧ろ人間の監督の下なる此天地こそ」と發心したか悟つたか、兎に角、小乘の思ひあきらめとやら、諦めきつて、籠の中なる株の上にて聲張り上げて揚々乎として歌ふ。我母、例の女中、隣の例のお婆さん等に一入いたはられ可愛がられて、享年五歳にして歿した。病革るや、苦げなる中よりいと殘り惜げに、其小やかな丸き眼に熱涙を浮べて感謝の意を表するやうつであた。實どいへば此日吾輩の家の勝手元では彼の重患の爲に大騒動であつたのだ。我母が水に溶かして與へし寶丹の一小片か幸にして一夜丈彼の命脈を延ばしたが、翌朝、母女中婆さん及び吾輩並に妹等の看護の下に、彼は我輩の掌の上で溘焉として眠るが如くに上天した。隨分辛酸を嘗めたことは嘗めたが先づ大体に於て天壽を全うしたものといつてよからう。さうあきらめたものゝ、尚ほ吾輩は心殘りに思つた。

吾輩は彼の葬式を鄭重に營み終つて、歸つて來た。妹も女中も悄然として一語もない。我母は徐ろに吾輩に向つて諭された、何れにしても可哀想だ、と。

吾輩は、其後、相變らずに、自然界に逍樂をやつて居る。實は我輩が專攻以外の道樂的研究といふのか全く自然界にあるのたが、併し今日に至つても、今は亡き母の彼の訓戒をは決して忘ない、今後といへども忘られないたらう。研究の爲といつても徒らに苦しめたり悲しめたりはしないで、可成彼等の自然のまゝなるに觀察し考究しやうと思つて居る。イヤそれは飛んだ愚痴つぽいをでした。此次にはもつと元氣に引つぎ實驗談を致さう。

幼稚園へ子供を入れることに就いて

東基吉

さて、宅の子供もこの三月で滿三歳になるから幼稚園へ入園ようかどうしよう。何日だつたか、懇意な先生に相談した事もあつたけが、あの先生の御話では、なあに幼稚園なんか詰らない。一體子供の時には、そう頭へ何か詰め込むのでないのに、幼稚園では、いろ〳〵唱歌とかお話とか手細工などを教へ込まふとする。又子供の時分にはなるべく自由に活動させるべきだのに、幼稚園では兎角、活動を制限する傾がある。だからして、まあ〳〵お廢しなさい、お廢しなさいといふ樣に仰つて居たから、つい其儘にして居たものゝ、お隣りでも、この四月からお入園ださうだし、それに聞いて見るも、大分善い家のお子供や、先生方のお子さんなども澤山通園してる樣子だから先生はあんなに仰つたものゝ、どうにかして家のも入園て見ては、どうだらう。然し、もし萬一して、あの先生の仰つた樣に詰らないもので、反つて子供の不爲になる樣でも困るし、はて、どうしたものでしよう。そんなに詰らないものなら、あんな先生方がお子さんを入園筈もなからうし、夫かといつて、一方には、詰らないなんて仰る方も大分ある樣だし……

まあ、ソんな風に幼稚園に就いていろ〳〵お迷になる方々が隨分世間に澤山ありますが。私は夫は皆御尤なお迷ひだと申し上げたいのであります。で、私はこゝに、子供を幼稚園に入園るに就いておつ母さん方の前以ての御注意と、夫から、善良な幼稚園では、どんな工合に子供を取り扱ふべきものであるか、果して彼の懇意な先生の仰つた樣に心配のあるものであるかどうかを記して見よう

と思ひます。

そこで、先づ子供を幼稚園に入れようかどうしようといふ問題が起りましたならば、第一に其子供の身の上に就いてよく考へて見ることが必要です。即ち取り分け其子供の身體の發達が不十分で兎角に薄弱で傳染病などに感染し易い素質の子供は、何方かといへば、まづ入園させない方が宜い精神の方から申しても、餘りに神經質で、何事でも非常に氣にするといふ風の子供は、同じく入園させない方が宜しいと思ふ。子供の時の非常な神經質は、多くは身體が薄弱な爲めであるし、又か樣な子供は、例令餘程注意の行き届く幼稚園であつても、多數の子供と共同的に動作させる上に於いて、益〻神經を刺戟せしむる恐があるからであります。私の考では、子供が非常に健康であるならば兎に角、若し親達の方で、どうだか知らんといふ疑のある時分には、先づ第一に親切で確かな小兒科醫と相談の上で、入園させる、させないを決めるのが宜しいと思ふのであります。尤もか樣な虛弱な子供の爲に出來て居る幼稚園ならば特別です。

夫で、先づ子供の方は決つたとする。そこで愈入園させる段になつてからが、又一つの考へねはならぬ重要な問題がある。何かといふと幼稚園の選擇、即ち、どの幼稚園へ入れてよいかといふ問題であります、御承知の通り幼稚園教育は、小學校の樣な義務教育とは違ふ。ですから、この子供ならは幼稚園へやつて宜しいと決つても、さて何處の幼稚園へ必らず入れなければならぬといふ性質のものではありませぬ。氣に入つた幼稚園がなかつたならば、勿論通園させないで宜しいのである。子供の狀態も考へないで、又入園さすへき幼稚園のことも調べて見ないで、たゞ隣りのもやつてある、何處の先生の坊ちやんも這入つて居るだから何とかして宅のも入園させないでは、といふ樣な單純な考から、入園させるべき幼稚園の

有樣も調べて見ないで、何處でも構はず入園させるといふ風なのは、實際子供の教育について心ある親達とは申されないだらうと考へられます。

そんならば、どういふ幼稚園ならば安心して子供を入れることが出來ようかといふ尋ねになりますかこれは實際一言で申し述べることは困難でありますが、大體から申しますと、

（イ）住宅と餘り遠からぬ幼稚園　が其條件の一つであります。餘り通園距離が遠いですと、通園の途中で風邪を引かしたり、夏などは暑さに當つたりする恐があるし、其他送り迎へや、又萬一の場合などには非常な不便があります。三歳や六歳の子供を、芝の端から本郷までも通園させるなどは、實際、保育の精神に沿はぬといつて宜しいと思ひます。

（ロ）適當な位置にある幼稚園　といふことが又考へねばならぬ内の一つであります。適當な位置と申す意味は、子供の日々通園する途中、又園の近邊に危險の少ない場所といふことで、例令ば其途中屢々電車の線路を横ぎらねばならぬとか、又園の近邊が、非常に雜沓を極めて居るとかは皆不適當な場所です。如何に幼稚園へ通はせたいからと云つて、間違つて電車にでも轢れ樣ものならば夫こそ全で臺なしといふべきでありませう、又衛生上からも考へねばなりませぬ。例令へば園の位置が非常に濕地でないかどうか、飲料水の供給は如何、其近邊の排水は十分であるかといふ樣なことも、大體考へねばなりません。

（ハ）設備設計の十分な幼稚園　先づ通園距離もよし位置もよし、然らば其園はどんな出來であるかといふことを一つ考へて見る。この點で第一に運動場即ち遊園と、又遊園に相應した設備即ち樹木とか花壇とか芝生とかと云ふ類のものが備はつて居るか居らないかを、見るべきであります。私は常に考へて居る、遊園は幼稚園の生命で、遊園のない幼稚園は例令ば水のない川の樣のものだ

と、之は地方よりも殊に東京でさうなのであります、東京では、お互の住宅にさう廣々とした庭がありませぬ。夫に子供と申すものは、兎角外で遊びたがる。往來に出て遊んでは自轉車や電車で危いし、といつて公園へは遠いし、實に東京には、子供の遊ぶ世界が乏しい、そこでこの幼稚園で以て、廣々とした、庭を備へて、そこで遊ばせてくれると。子供は滿足するし、又實際子供の爲にもなるのでありますから、是非この遊園の適當なものを備へたのが必要である。然し東京の樣な繁華な所土一升金一升といふ場所でこんなことを望むのは無理かも知れぬが、理想としては是非かうありたいのです。

夫から、保育室の廣さは適當であるかどうか、風通りがよいか惡いか、光線の取り方が具合能く出來て居るかどうかといふ樣な事も十分考へねばなりませぬ。狹くるしい一室に三十人も四十人もつめ込んで、薄暗い窓の下で畫かゝせたり、手技をさせたりして、居る幼稚園も隨分ないことはありませぬ。夫から便所の設備なども適當に出來て居るか居ないか、餘り保育室に近く、其上防臭材もやらないと見えて、絶えず、便所の臭氣に襲はれて居る幼稚園がないでもありませぬ。又其幼稚園の園醫はどうなつて居るか、毎日出診してくれるか、又は病兒があつた時はどんな取扱をして居るかなどいふことを考へて調べるのは、最も大切な條件であります、すべてか樣な事柄は素人の方にでも一見して分ることですから、子供を幼稚園に入れるに付いては、是非一度でも二度でも、其幼稚園へ行つて、之等のことを觀て參る必要が大にあるのでありまして、これは實際兩親の其子供に對する義務であります。

其他凡べての衛生上、の設備が十分注意されて居るかどうか、其内部のことも考へねばならないのですが、これは外から一見した丈では一寸分りませぬから、この方は其道に關係した方々に付き

て聞き合はせば、大低何處の幼稚園はどうといふ樣なことが分りませう。

先づ大體、以上のことに付いて考へて見て、これ等の條件に合はぬ樣ならば、先づ其幼稚園は子供を入れるに不適當と斷定して宜しいと思ひます。即ち住宅からの距離も非常に遠い、幼稚園の位置も宜しくない、其他設備設計も不十分で園醫も定まつて居ないとなれば、其樣な幼稚園には大切な子供はやれませぬ。よし近所の誰れ彼れが、揃つて入園させても一切構ひませぬ、斷然入れぬ方が宜しいのであります。

次は愈く其園の內部のこと　即ち實際、子供を取り扱ふ保姆の問題になるのですが、これは何れ號を改めて、お話することにしませう。

▲珍らしき結婚　英國の北部に在るトレールと稱する一小に村で此程擧行せられたる結婚は類少なきものなり四人の新郎は孰れもジョンスーマースと云ふ農夫の子にして年齡は一年宛の相違あるのみ四人の新夫も亦姉妹にしてジエ：ムス、ホッチステットラーの女なるが年齡は最年長の姉二十八歳にして末の妹十八歳なり此八人は一戶を隔てたる隣家に居住したるものなり

▲鱶の話　フカは生れ落ちると直ぐ力に合ひさうな相手に攻擊を試みる、大鱶は人肉が大好きだ、鼻で嗅ぐ力が強く遠くから人の臭ひ死骸の臭ひを嗅ぎ分けるソシて或學者の說によると同じ人肉の中でも西洋人の肉が一番好ぎである、其次が亞細亞人、其又次がアフリカの黑人であるさうな、鱶が人肉を味はん爲に船に附き纏ふのは珍らしくない、時には船の上に働てゐる荒くれ男を躍り上つて水へ咬ゝ込む、又全速力で走つてゐる大船の欄干迄も飛掛つて水夫を跳ね落すこともある、或時、一人の黑人の死骸を帆桁の端から水の上廿尺の高さに吊るして置た處が、一匹の大鱶が追て來た甲板の上では船員一同鱶が何をするかと見てゐた、すると鱶は何度も何度も躍り上つて死骸を少しづゝ咬み切り暫しの間に食つて仕舞つたさうである、あの大きな、廿尺から卅五六尺もある体を廿尺の高さに跳ぬ上ぐる尾の力は實に大したものである『海事雜報』（鱶）

金錢に對する觀念

佐治實然

日本人は兎角に金錢を卑むの風がありますが、人間が此の世の中に生存して獨立自營し、人に迷惑を掛けず自分は自分で超然として社會の上に立ち高貴にも屈せず社會にも諂はずして、自分の本分を盡して行かうとするには金錢を大切にして、相當の資産を持つて世に生存すると云ふことが必要であります、人は其技倆に依つて何處迄でも發達をなし、大臣となる人もありませう、それを動物に譬へれば、象の如く虎の如き人でありませう、併しまた私共の如きものもありまして、動物で申せば鼷鼠のやうなものでありませう、併し鼷鼠でも鼷鼠丈けの本文を盡せばそれで足るので、象や虎の處へ行つて頭を垂れて食を求めることも致しません、私は元來個人としては下僕に至るまて相當の敬意を拂ひますが、社會であるとか國家であるとか云ふものは、餘り立派なものと思ふて居りませんから、社會の人ではありますが、社會より超然として身を處理する覺悟であります。

扨て金錢を正當に用ゐる人と否とに依つて、人格に於ても甚だ異なつて參ります、友人のうちにても二種の人があります、一は金錢を浪費する人、一は金錢を大切に扱ふ人であります、金錢を浪費する人の家に行つて見ますと、甚だ待遇が宜しくて、客が行くとそれ酒を出せ鮓を取れ、蕎麥を取れと云ふ風でありますが、扨てこの友人は何時か人に金を借して呉れいと頼みに來る友人でありまして、能く〳〵調べて見ると甲の彼にも乙の友にも借りて居ると云ふ有樣であります、これに反して金錢を大切にする人の家に行きますと、澁茶を一杯出す丈けて、客に對しては甚だ不待遇の樣でありますが、何年交際しても金の無心などを申出たことなく、正實の人として永く交際が出來る人であります、右二種の人は何れが果して立派なる

人間でありませうか。

私は近頃甚だ面白ひ婦人を見ました、其の婦人は數年前に私の近所に居つた人でありますが、三十歳を越して居るに琴の稽古を始め出して、師匠を家に招いて習ひ始めました、私は其時思ふた、これは甚だ誤つて居る、末が甚だ案じられたものであると思ふて居りましたが、數日前不圖破れたる小さな家から、貧に窶れた婦人が顔を出して居るのを能く見ますと、それは前の婦人でありまして、私の豫想の適中して居つたのを覺つたのでありますが、人には各々其分に應し、其時時に處して行くべき仕方があるので、其分を超過してまでなす事柄は、多くは外見を飾ることになります。近頃家計を整へるについて、毎月の豫算を作つてこれに依つて處理して行くとか云ふ家庭があるさうでありますが、私はそれは間違ひであると思ひます、一萬圓とか二萬圓とか云ふ一ヶ年の支出がある大家には豫算表も必用かも知りませぬが百圓取りや五十圓取りの貧民生活を營む家庭には不必要であると思ひます、私は片端より使ふて行くがよい、豫算に振別ける程の餘地がないと云ふのであります、片端より使ふて行くのは勝手に使へと云ふ意味ではありません、必用止を得ぬものに片端より使用して行くので、一ヶ月を締め上けた處で給料丈けで不足の恐れがあれば、不必用なものから減じて行くのであります、食費で減ずることが出來ねば、家賃とか衣服とか交際費とか云ふものので減じて行き、大なる勇氣と決心とを以つて不必用と認むる部分は斷然と減じて行かねばなりません、人目が何うとか、社會が何うとか云ふことは眼中になくともよいのであります、其の決心と勇氣が無くては何時まで立つても獨立は出來ませんまた、主人とか主婦とかの小使費と云ふものは不必用であります、私は數年間小使錢と云ふものを使ふたことがありません、交際上より宴會に臨むことがあれば、それは小使では無い交際費であ

る、また家庭の人々を連れて料理でも食ふとすれは、それは慰安費と云ふもので小使費ではない、つまり金錢は使用の途の正確に知れぬものには、一文たりとも出す可き性質のものでないと云ふことを常に考へて居らねばなりませぬ、今の若き人は學士にでもなつて、月給の五十圓位ゐ貰ふと人間並になつたかの如く考へ、それ妻を迎へる家を値る、下女を置くと云ふ風であるが、五十圓ばかりの東京生活は、貧民たるを免れぬ生活でありますから、これから人の妻君となるものは、豫め貧民生活を盡すの考へがなくてはなりませぬ、貧民は何んなものを食つて活きて居るかを研究するが宜しい、魚屋なぞでも品質を上中下の三通りに分類をして居り、八百屋でもさうであるから、食物を買ふにも充分の注意を拂つて經濟的に遣つて行かぬと生計を營むことが出來ないのであります。要するに世に處して往くことは、餘程六ケ敷いことでありますが、其秘訣は心を鞏固に持つと云ふことであります、昔し擊劍の奥儀を傳へる爲めに卷物を貰ふた何んな奥儀があるかと思ふて開いて見たら「心」と云ふ一字があつたと云ふ話がありますが、それと同しく金錢に對する觀念も只心掛け次第にあり、不必要なる費用は決して使用せぬと云ふことさへ確かであれば、金錢を貯へることの如きは容易に行はれることであります。(新婦人)

▲歐洲に於ける馬肉需要增加　馬肉の需要は近來歐洲諸國に於ても次第に增加する傾向ありて西班牙人の如きは從來宗教上の意味より全く馬肉を食せざりしが近來之を食するもの少なからざるに至れり最も多く馬肉を消費するは佛國民にして墺地利之に次ぎ同國首府維也納に於る千八百九十四年の屠馬數は一万八千二百〇九頭なり獨逸伯林にては千八百四十七年の屠馬數僅に三千頭なりしもの千九百二年には一万二千七百〇三頭に增加し普魯西にては千九百二年に八万五千八百二十頭の馬を屠殺したる由なり

フレーベルの子守歌

孤蓬生

母といものは、其本能として、其子供の四肢を運動させる爲にいろ〳〵な一寸した遊戯を發明して子供にやらせる、それは子供の發展を助ける事は勿論であるが然し一般に本能的の仕事は不完全、不理論的たるを免れないで、只世の母や乳母が本能的遺傳的にやつてゐるのを改良して理論に合ひ眞に子供の爲になるやうにしたらよからうといふのがフレーベルの考であつた、子守歌の如きも同じである、一体歌といふものは人の心情が表にあらはれて出來るものであるが又反射的に其歌が心の方に影響するものである。或人の言葉に國歌によりて法律の必要が少なくなるといつたのはやはり歌の人情風俗に大きな關係のある事をいふたのであらう。してみると子守歌などは常に、口も利けぬ内から謠つて聞かせてゐるものだから最も注意すべきものであらう。昔から代々相傳はつて來た子守歌といふものは各文明に相似たものが多い之は即ち本能的に作られる者であるからであるがフレーベルは之等子守歌の中からよく目的に適ふものを集めた。彼は此子守歌の觀察研究には非常に苦心したもので、百姓の家へ行つて母が子守してゐるのを見たり歌を謠つてゐるのを聞いたり町へ出れば乳母車の後から乳母の歌を聞いてる樣にした、母といふものは子供に對して默つてゐる事はない何んな小さい赤ん坊にでも始終何か話をしてゐる之は人間に最も必要である言葉を早くから子供に聞き習はせて覺えさせうといふ本能的の動作である、又母はその言葉と同じく何といふ事なしに只歌を謠つて聞かすのであるが、別に此歌で如何しやうといふ事はない、只盲目的にやつてゐる、フレーベルは此等の簡單な歌の中に重大な

意味を發見して、之を教育上に應用しやうとしたのである、即ち彼は之によつて子供の身体の發展同情、自然との關係を知しむる等に利益を數へたのである、一体母は幼兒にとりては自然界の媒介役であるから機會を捕へては自然界を紹介する勞をとらなければならぬ。

こゝにフレーベルの子守歌といふも只我國のねんねこ歌とは別で之は運動を伴ふた一種の幼ない唱歌である、氏は之を作つて世の母たる者の爲に資したのである、極く幼稚な者には勿論体操の樣な身体の各筋を悉く運動さすといふ樣な事は出來ないからそう嚴格なものはとても出來ないで、氏のいふて居る中には手の運動が重である、小さい子供を外へ連れて出ると先づ子供は運動してをるもの搖いてをるものを認める、例へは旗だとか風見だとかいふやうな物に目が付く、で氏は「風見」といふのを初めに出してゐるが之は子供が最早言葉が分る樣になつたなら、少に風の吹く時の有樣を說明するのに用られやうとふいのである。

○風見

之は掌をひろげて前て出しゆら〳〵動かすのである、即ち手、腕、の筋肉を運動させる爲のものである次にある格言とあるのは母の爲にしたもので子供の歌とあるのが即ち子供に歌はすのである。勿論之は一寸いきなり譯したのであるから意味がわかる丈で口調や何か、全く表す事が出來ないのである、讀者諸君は只こんなものだらうと想像して御參考に供して貰ひたい。

母の格言

坊やが目ん目で見るものでたやすい教を見つけんと
母ちやん達が思ふなら
見せて物の名教へたら
直ぐに其眞似させなさい
坊やは喜びならいませう

子供の歌

風がふいてぐる〳〵と
屋根の風見がまはるやうに
小さい坊やの手をまはし
ぐる〳〵〳〵とならいませう

次に出てゐるのは月に付てのです。

○子供と月

母の格言

なぜに遠くにあるものが
坊やにや近く見えるのか
なぜに坊やは遠いものを
近くへよこさうとするのだろ

母よ此には深い意味
神秘のしるしを神さまが
坊やの汚れぬ魂に
刻み込んだぢやないですか

それは子供のこゝろには
天地も海も大空も
一緒にしてゐるよき夢を
破らぬやうとの教です

それは子供の心には
限る界がありません
子供に見える物みなは
大きく緒いた全体と
見えるものよと教へます

かういふ子供の知覺には
貴い眞理はないですか
神が天地に與へたる
則のしるしはないですか

愛のみ則のおんしるし
愛と一如の源を

み神によりて學ぶやう
母よ！坊やに教へなさい

坊やのこんなよい夢を
決して破つちやなりません
變らぬ愛を見るやうに
開いた心に教へなさい

坊やに出でよごらんなさい
おー月さんがのーぼつて
「おー月さんよ大空の
きれーなラちから下りてこい」

「坊やのところへ行きたいが
青いお家を出られません
だから照して上げませう
「私は下へ下りて來て

坊やのよい子と遊べない
けれども毎晩出て來てば
上から坊やを照らします

「こんなに離れてゐるけれど
二人は中よいお友達
おとなでゐたらば又ぢきに
母ちやんと坊やを照しませう」

子供の歌

「二人は友よおー月さん
お前が上から照らすなら
坊やはうれしいすぐおいで
か愛がつてあげませう」

總てにんな流儀でまだいろんなものを作つてゐる
「鳥の巣」とか「花籠」とかいふのもある何れも自然
界に親むと同時に身体の或部分を運動させ又言葉
を教へ兒童の子供らしい無邪氣な所を發展させる
やうにとめてゐる。

我國は幼稚園教育がまだ甚だ幼稚であるが所謂搖籃教育についても考へてゐる人は少ない。本當に眞面目な研究は勿論相當な學者に待たなければなるまいが併し世の母さま達は自分の子供について極めて小さい時からどんなに導いたら宜しかろうか其感官や身体並びに精神をどう開發せしめたらよからうといふやうな事は呑氣に學者のいふ事を待つてゐず自分の責任と思つて自ら工夫せなければならぬ事でせう

○あこがれ

高橋立吉

（一）

せみの小川に、水滿ちて、
そよ吹く風に、搖られつゝ、
苔綠なる、つゝみには、
名も無き草も、花咲きぬ、
日は麗らかに、塵起たず、
平和に滿てる、鄙の春、

（二）

尙うら若き、麥の穗の、
穗波そろへる、畦徑に、
幼兒一人、目を擧げて、
上る告天子の、影追へば、
影は御空に、消えながら、
譜は落ちぬ、地の上に、

（三）

「鳥とならばや」、我も亦、
羈絆のがれて、大空に、
飛びて翺りて、謠はなむ、
衣袖を翼に、飛び見れば、
夢やぶられて、蝶一つ、
草花より出でゝ、飛び去りぬ。

▲好評を博したる新劇　今年の倫敦淫節に同地の劇場に於て稀有の好評を博したる新劇はアルフレッド、ストロ氏の作なる「グレードの名譽」と題するものにして其筋の概略はジョージ、アレキサンダーと云ふ米國の一富豪が年若き一美人の歡心を買ひて終に結婚を爲すに至り最初其婦人は富豪　生活を愉快に感じ夫を助けて富の增殖を計りたるも其後夫と共に巴里に赴きルロードと云ふ美術家の宅に招かれて客となりてより種々の錯雜したる事情を生じ最後に其婦人はルロードと脫走しグレードは落膽して米國に歸り婦人の信ずべからざるを知りて專心金儲に其生涯を送ると云ふにありて各國に於けゝ最近の人情を極めて巧みに描きたるは喝采を博したる所以なりと

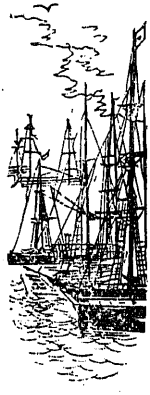
決斷力が鈍い

高島米峰

婦人の多數は男子に比べて餘程決斷力が鈍い。善く言へば周到で微細の點に迄氣がつくから自然決斷に時を要するのであらうが、兎に角決斷力の鈍いのは啻に自分を損ずる丈けでなく、他人に迷惑をかける事が尠くない。或小間物屋の番頭さんが言　には、「イヤもう、とても堪まりませぬ。商は　アキナヒ（厭きない）だ。これが自分の仕事だと考へ直しますからこそやッて參りますものゝ、時には心からイヤになることもございます。男のお客ならこちらの方がお似合で遊ばすとかお爲によろしうございますとか申せば、ズン〳〵片がつきますが、御婦人方と來ては僅か二錢か三錢の替一本お求めになるにも、まづ五六十錢位の所まで、順々に御覽になつて、あれだ、これだ、高い、安い、ヂヤこッちにしやう、イヤ待てお吳れ、こッちの方がどうかしゝ、など漸〳〵お話が纏まッて代金はと申すと、五圓か十圓の札をお出しになる、二錢三錢の品を買ッて頂いて　まるで只で兩替をして上ばるやうなものなものです、それもマアよいとして、お釣を渡して送り出しますと、一二時間たつてヒョクリやッてお出でになり「さッきネ、取ッていッたンですが何だか母が面白くないッて申しますからあッちのと取り替へて下さいナ」などゝいふことは、殆ど普通になつて居ります之ては迚も商賣にもなりませんのです時々愚痴を溢すこともございます。」

成程之ては堪るまい。此一事に見ても婦人の決斷力の鈍いのが如何に他人に迷惑をかけるかゞ解るではないか

（愛國婦人）



印度の婦人

印度婦人　ミス、シング

日本國の婦人達は我國の婦人とは違ひ非常に幸福なことですがそは全く御國の進歩の結果と思ひます、私共は階級制度や色々の弊習に束縛され、仕合なる生涯を作ることが出來ません、

印度では異階級の者は相結びて共同事業を營むこと出來ず、又子女は漸く讀書時代に成ると、無理にても嫁入を命ぜられ、本來の宿望ありとも教育を受くること出來ません、又ラマカ政治としてマホメット教を信する婦人が早婚して死ぬ迄、其家の戸外に出ることは出來ぬとしてあるから、戸外の樂は全く無きのみならず、天然物に對しては、美育や物理の觀念は閉鎖されて恰も囚人同樣である。

教育の方面を申すと、今より五十年前女子の爲め大學が開かれたるが、漸く自由に入學の出來るように爲りたるは、二三十年前の事である、其學校の組織は單に高等學校でなくして、一般教育で、生徒の中にては子を背負ひて勉強する者もあり、その後寄宿舍の設もあり、段々高等女學校の如きものも出來た、二十五年以前に印度に於て、幾らか婦人が高等教育を受けたい人が盛になりました

印度の教育制度は先づ全國を五部に分ち、其一部毎に一つの大學が有り之に數多の高等學校が附屬して居る而して大學とは、教育所でなく、試驗場である學位を得んと欲する者は、男女に拘はらず、志願することが出來る、試驗委員は英國より來て、警官立會の上にて施行する習慣である、然るに婦人の中にも腦力強き者ありて、私の學校生徒で三百人の候補者中より學者を取り又は及第者中二三の席次を占むる者も有りたり。

今日では女子教育は一般に注意さるゝに至りた

るも、上流社會にて資產ある者は、左程重用視せぬは、遺憾なれども私はこれより此等の者と相謀り、女子敎育振起策を講じようと思ふ。

私の學校の格言として守る所の者は「吾等は與へるが爲に受くるなり」にて即ち人の與へるが爲に享るなりと云ふ詞で此は私の學校のみならず印度一般高等敎育を望む者の格言である。

（大日本婦人敎育會雜誌）

◉圓滿なる並に不和なる家庭の實例

高島平三郎氏

或處に母と一人の息子とが暮して居た。其息子に妻を娶ツた處が、姑は嫁に對して十分の同情を寄せ、嫁も亦よく姑に事へ良人に愛敬を盡すので些の波風も立ツた事がない。一日良人は薪を造ると云て樹に登り枝を伐ツて居ると其枝が過つて樹下に在ツた釜を破した。そこで嫁は「私放心して釜を樹の下に置いたものですから……」と言ツて其粗忽を謝ツて居る。又良人は良人で「マア〳〵負傷をしなかッたのが何より だ。不注意に投げ下して濟まなかッたと……」詫びて居る、そこへ姑が出て來て「私が嫁に氣を付けて差圖をしてやらなかッたのが悪かッた……」と言ツて居る。萬事が此通りで互に思遣があるから何時も和氣藹々たる家庭を作ッたといふ

或處に母と一人の子が住んでゐた。其子に妻を迎へてからはイツも家内に波風が絶えなかつた、或日夫は用事で旅をするとて、自分で草鞋を作り、母は其子の看るべき衣物の袖を縫ひ、妻は其辨當を拵へるとて釜から飯を移してゐた、三人共中々忙がしい然るに姑はジロリ〳〵と嫁がする仕事を見て居る。嫁は姑が何をしてゐるのかとチラリ〳〵と見る。夫はまた嫁姑の仲の悪いのを心配して二人に心を配つて居る。三人共イツか手許がお留守になつたゝめに、夫は一丈餘りの草鞋を拵へ嫁は飯を悉く灰の中に移し姑は衣物の袖口を皆な縫つて仕舞つたといふ（兒童研究）

小兒の精神過勞

アルフレッド、チエルニー

現今一般に懼るべきは、小兒の精神過勞なり、そは生長後神經病を起すこと多し、此過勞は主に學校課業に基くが故に、初年級には詩歌を省き、或は就學年齡を延長せんとし、多數者は遠足等を以て就學時間を減じ、或は休暇の期限を延長せんと唱ふるも、未だ一定の確論なし、然れども學校の課業を以て兒童に有害なりとするは近世一般の思想なるが如し、「エルレン キー」氏が學校は精神を斃ぶると說きしに當り之に贊成する者非常に多かりき。

元來學校なるものは兒童の身體及精神に適當するを要す、又精神病性の昂進せる兒童に對しては特種の學校を設け、授業を制限する要あり、併し特種學校を設くること、左程多數を要せぬ、何となれば神經病の原因は、學校よりも家庭よりも多し、兒童の精神過勞は就學以前に既に存す、兒童が既に談話するを得れば諸種の質問を試み、絕へず新知識を得て、興味を感じながら、實地學修を爲し、何等時間を制限する等の事なきは常なり、然るに大人は兒童の聞くを喜びて際限なく語り、彼等の年齡發育に相當するや、否やを顧みざること多し、此結果として初生年に於て既に神經病の徵候を現はすに至る、此弊害を去るには年少き兒童は可成兒童の間に成長せしめ、大人と接觸すること少くするに在り、斯く兒童同士を放置すれば、諸種の質問の如きは已まん、孤獨の兒童は自己の仕業の變化を好む、從つて其退屈を防ぐには諸種の玩具を備ふるを要す、一家族中の兒童と玩具の數は反比例を爲すとは殆ど事實なり然るに兒童が相集りて遊ぶや、玩具も之を變換する必要もなく、大仕掛にて無害なる遊戲を爲すを以て、兒童として別に要求する所なし。

意志の支配力を養ふことは敎育上大切にして兒

童相集り遊ぶ時は此力を養ふこと多し、何となれば兒童にして若し固有の自我性を主張すれば共同遊戯は行ふを得ざればなり、感情の强さ兒童は遊戯の際體温を起し、發汗すること容易なり又顏色の蒼白となることあるも之は過勢に歸すると見做さる、然れとも是れ精神過勞の徵なり頗の紅色となるは却て害なし。

又兒童を登校せしめず小學一學年の課業は自宅にて教授する者多きが、然れども精神健全の兒童は既に滿六才に至れば、家庭に於て終日を適當に暮すこと容易ならず、夏季休業の際の如き兒童が滿足して時日を消すことを得れども、冬季休業の時に至りては極めて華麗なる室に在りても、倦厭の情を催し、之が爲め精神活潑なる兒童は、神經病を起すことあり、此の如きは學校に於ける努力よりも怖るべきなり、倦厭及自己の身體に注意を集中することは六歲前後の兒童にては學校の授業に依りて之を防ぐことを得るなり、自宅教授は時間を制限する便あれども兒童が注意に努むる所は學校の時間よりも大なり自宅教授の弊の尙大なるものは兒童が無用の時間を有するに過ぐ、經驗によれば第一學年の際自宅教授を受けたる者は將來入學後學校の課業に耐ゆること困難なり。

「人性三の五」

▲世界的宗教　英國の有名なるアンニー　ベザント夫人は同國の一雜誌に於て從來の諸宗教は今後全く信徒を失ひ世界の人類は一般に世界的宗教を信ずるに至るべしと說き世界的宗教の如何なるものなるかを想像して曰く世界的宗教は一の經典を有せず科學に關する著書は總て之を尊敬し倫理と毫も撞着することなく人類と宇宙との關係を人に知らしむるものにして萬世不變の眞理を傳ふるものならざるべからず換言すれば從來の諸宗教は世界的宗教の一分派たるものにして世界的宗教は悉く此等を總合したる大合同的の宗教なりと

寄生虫

新兎義男

人間の体内に小動物が寄生して種々の病氣を生するものを寄生虫病と申します。寄生虫病には種類が澤山にありまして、身体の種々の部分に來る處の病でありますが、今日は時節がら盛暑の事であつて、飲食物に原因する、寄生虫病が澤山にあるから飲料、肉類及野菜類等の調理に就いての衛生的豫防の注意をお話し致そうと思ひます。

先づ飲料にては水であります。水は夏日最も廣く飲用せられたるもので水道の設けある所では左程危險はありませぬが、河水、池水、溪流、不完全なる井の水等には危險が多くあります。

波の溪流や、池、河等の水は田圃山谷を環流して種々なる病的黴菌を混ずる外、虫類及其卵が水中に混じて流れて居るから、若し之れに注意せず清潔なる水だと思つて飲ときは後日に至つて思はぬ寄生虫病に懸ります。農夫が耕耘の際又は旅客行軍者等の煩喝を醫する爲めに之れを飲用して其結果寄生蟲病に懸る事のあるのは是れが爲めであります。其寄生虫の種類は已に取調べられたる物や未だ發見せられぬ所の寄生虫が澤山あつて一々云ふ事は出來ませぬが今日迄發見せられ居る處のものは先づ蛔虫だの、蟯虫だの十二指腸虫、鞭虫、腹小鰻、肝二口虫、絲狀虫、肺二口虫、近來北陸地方にある恙虫病などの寄生虫であります。かゝる虫類は流水が田圃、溪間を流れ其地方を灌漑浸潤するの際田圃の肥料や其附近に存在する病的虫や其卵を混じて流れて居るから之れを飲み下すときは消化器中に於て死滅せられる事なく反つて生長し又は孵化して其の各虫の好む處に侵入し種々の病氣を起すもので、即ち肝二口虫は肝臓に寄生

して肝臓病を發し肺二口虫の肺に寄生して喀血病を生し、糸狀虫の血細管淋巴細管に侵入して血尿病等を發生するのは此れで河川池沼等の水を妄りに飲用するのは誠に危險であります尚井の水と雖も不完全なる井の水はよく煮沸して飲用せねばなりませぬ、凡そ煮沸せしものは其高熱の爲寄生体は悉く死滅したれば体中に入るも生育するをが出來ません。

次に野菜類ですが、野菜は夏冬ともに食用上要用のものであるが殊に夏は野菜の種類も多く又肉類よりも多量に食用に供せられる物である、此野菜には寄生虫が中々に多いから寄生虫の主なるものを掲げて話して見よう、野菜類は皆田圃に產するものであつて、目下食用に供しつゝある茄子、胡瓜、南瓜、白瓜、西瓜、甜瓜、冬瓜の類菜類、莢豆類大根類、チサ、キャベツ菓物など中々澤山あつて野菜類の調理は種々ありますが、煮熟する調理法は別段危險がありませぬ、併し瓜類、菜類大根類等の漬物、殊に一夜漬など云ふ香の物、西洋料理の生キャベツ等は甚だ危險であります、其譯を申しすれば、凡て野菜類は前に申ました如く寄生虫や其卵を混へたる肥料を以つて作るのですから、此等何れの野菜も寄生孔虫や其卵が附着して居らぬとは申されませぬ、而して此の寄生虫は甚だ微少なるものでありますから人の眼にはとまりませぬ、從つて水で洗つても洗いとれるかとれぬか分りませぬ。彼の一夜漬にしまして食膳に供するときは漬物に附着せる孔虫や其卵殼は外面のみ食鹽に浸されるも内部は依然として生活を營むて居るから甚だ危險であります故に漬物は永く鹽に漬けて孔虫や卵殼の内部に浸潤せしめ之れを殺されなければ不安心であります。

世間に澤山ある蛔虫病を起す原因は前に述べた野菜調理の不注意や蛔虫卵の附着せる物体を口にする等が原因となつて起る物であります。此蛔虫寄生病は腸胃を害するのみでなく神經障害を起した

り貧血をしたり黄疸を起したり其外腸を穿孔して腹膜炎膿瘍を生じたり殊に小兒には痙攣を來し腦膜炎の如き恐るべき病狀を來す事があります又野菜には十二指腸虫の孵虫卵が附着して居つて此れも亦恐るべき病症を發生致します、此附着したる野菜を食するときは人の十二指腸に寄住して其處に咬着し血液を吸吮して生活するものであります其れ故に其虫が漸々に增加しますると劇甚の貧血を起しまして初めは胃病の如き容体に消化器病の治療を施しても治らず追々血を失ひ身体に浮腫を生じ遂に死するに至る事があります其他野菜に附着せる寄生虫發源は澤山にありまして一々説明する譯には參りませぬが既に寄生虫病の豫防には成る可く野菜の生食不完全の鹽漬等は禁じねばなりませぬ或研究家が此れ等の寄生虫の卵が食鹽に對しての抵抗力を取調べましたのに依れば卵は中々抵抗力が深くて純食鹽に浸漬する事七日間なるも尚一部分の孵化を見る事があるそうです併し幼虫は一五「プロセント」以上の食鹽水中に於ては死滅すると云ふ事です。是れに依つて見ると餘程永く鹽漬にせねば豫防が出來ないのですから一夜漬の如きは持つての外の事だと思ひます。

殊に東京市附近の田圃に供給する肥料は多く市住民の肥料で市住民内には日本全國民は申すに及ばず海外人も頻繁に出入する事ですから肥料中に含有する寄生虫は從つて多數で一地方の肥料を以て其附近の田圃に供給するものと同日の談ではありませぬ其れ故に東京市内青物市場に上る蔬菜菓物は一層の注意を以て食用に供せねばなりませぬ。

肉類は大約魚、鳥、獸三類で其内最も多量に使用せられるものは魚類獸類でありまして精密なる寄生病源に就いての研探は未だ充分に出來ませぬが著しいものを説明すれば、先づ獸肉は牛肉、豚肉が主なるもので、此れ等の屠殺には政府が衛生上の規定を置き獸類の健否を檢査し病獸肉を販賣する事を禁してあるから一見販賣する處の肉類は

危險が無い樣です然し乍ら精細に注意すると中々危險でありますが何故となれば寄生虫病にかゝれる獸類も檢査の際は未だ其病徵を表はさず体中に伏在して居る物ですから健否を分つ事が不可能です從つて病肉を販賣する事がないとも限りませぬ、故に肉類に向つても之れが注意を要する所以であります。牛肉豚肉は日用缺く可からざる食用品で多くは煮熟して食用に供するものでありますが往々生肉鹽漬肉又は不全煮熟の物を食する事があるから從つて寄生虫病に懸る者も少くないですかれ充分煮熟してから食せねば甚だ危險であります肉類寄生虫の著しきものは條虫でありますが條虫には數種あつて有鈎條虫、無鈎條虫、裂頭條虫等です有鈎條虫は多く豚肉を食するから來るので即ち豚肉中に條虫の卵又は囊虫を存在するものを不注意の調理を以て食するから來るので無鈎條虫は多く牛肉鮭肉等の中にやはり囊虫又は卵となつて存在し此れを食するから起るのであります此等の肉を食するとき肉中に條虫の卵が含有せらるゝならば胃中に於て其れが孵化し虫子を生します、此虫子は腸や血管を穿出で身体の諸々の組織に逍遙して囊虫となり諸般の障害を爲すものであります又囊虫を含まるゝ肉を食するときは囊虫が胃の中に來て其囊を消化せられ腸に下りて段々節を生して長き條虫となり消化障害や下痢、神經症などを起します又裂頭條虫は魚肉中にあるもので鮪鮭は殊に注意せなければなりませぬ。若し此等の生肉を食ふときは前述の樣な結果を來します

亦施毛虫と云ふものがあります豚の外猫鼠狐等の獸肉中に生存して居まするから過つて此の肉を食すると胃中に於て大に繁殖して諸々の筋肉中に逍遙し消化障害筋痛浮腫發熱等を來し遂に人命を奪ふ事があります。

以上の肉類寄生虫は其著しき物を掲げたる者で其他に種々不明の寄生虫は魚鳥獸肉中に澤山寄生して居ます要するに完全なる煮熟を行はざる調理即

ち生肉鹽肉半熟の燒肉を食ふが如きは避けねばなりませぬ尙以上の諸食品其物の調理は完全なるに其食器を淸淨するに不潔の水を以てすればやはり危險であるから常に淸潔なる水で以て洗ふ樣心懸けねばなりませぬ。

家庭に注文の二ヶ條

農學博士
法學博士 新渡戸稻造

各家庭に向つて、お賴みしたいことは、時を定めて家族がより合つて、五分でも十分でも書物を讀むことである、それを朝の食事後とすれば、その時間は客があらうが、無からうが、もし客が來たならば、僅かの時間故待たして置いても、それを勵行する、耶蘇教信者なれば聖書の一節でもと云ふ所であるが、さうでない家庭には、わかり易い教訓の歌とか、徒然草の一章とか、經書の中からでもよいそこの日の思想を養ふものを、家族一般に今日はこの主義でやらうではないかと云ことを暗に示す、たとへば短氣は損氣と云ふことの話をすれば、云ふた人も言質をとられて居るやうなものであるから、その日は少々腹の立つことがあつても、勢ひ勘忍袋の緒を締めるやうになる、私は毎日紙片へ注意すべきことを書いて、今日はこれだぞと臺所へ貼出し、その說明をするやうにして居る、さればその日は一つの善事が行はれる、それか毎日の事であるから、自然家庭は自分の理想に近づくやうになる、それは召使の者も一つにしての話である。

それから今一つと云ふは、家族寄り集つて、朝なり夕なり、五分間か十分間か、皆寄合つて坐禪をするやうにして心を落つけることである、銘々かひそかにやつて居るのはあるが、一人でそれをすることは別として、私の注文するのは家族一同が、耶蘇教の默禱のやうに、無言で端坐する、就中忙がしいからそんな事はして居られぬと云ふ人もあらうが、忙がしければ忙かしい人ほど餘計にそれをして、心を落付ければならぬ、仕事をしたり遊んだりして經つ五分や十分は、瞬く程にも思はないか、その間無言で端坐して居ると、その一日の迷が減ずるやうに思、何うしても我々凡人は迷い易いものであるから、毎日僅かの時間を利用し瞑目端坐して精神を鍛へる、これを妻君とか子供とかは一人づゝでは出來ないから家族より合つて、細君にも、子供にもその癖をつけるやうにする、必ず精神の修養に利する所がある、

以上の二つの注文は、一日に僅か十分か十五分を費やすに過ぎないが、これによつて一家に規律立ち、一家を團欒することが出來る、私は經驗上多大の効果を得て居るから、これを更に多くの家庭に試みらるゝやう希望するのである。（女鑑）

氣風

牧羊

此間、清國から歸つた友達に久し振りで面會つた。連れて行つて居つた子供が、學齡に達したので、日本の學校へ入學させる爲めに、子供丈け置きに歸つたといふことである。いろ〳〵話しの末、子供の事に就て、次の樣に語つた。

清國では、相當な位置を保つて行くには、召使の樣なものが非常に澤山要る、先ゴコックとか、掃除人とか、取次とか、門番とか、ボーイとかといふ風に隨分な家僕が要る。一體に清國人は非常に子供を好む所からして、之等の從僕は、何れも子供の機嫌ばかり取る。子供はよい氣になつて、何んでも乎んでも從僕にもたれかゝる、幾ら此方で注意して、自分のことは自分でするなど云ふ樣に教育しても、陰に廻はつては、おさ之等の從僕の爲めに、破壞される。夫で自分は思つた、小さい時分から、こんな中に育ちて、我儘の氣風を養成されては、成長の後、始終順境でばかり行けばよいが、一旦逆境に立つた場合には、さつぱり意氣地のない人間になるであらふと、そこで、僕は斷然連れて戻つたのであると、

知識を與へるのは、教育の一の手段に過ぎぬ。教育の極點は、人の氣風を作るにある。智識の教育は多少後迄でも後で取返しは幾らでも付く。たゞこの氣風は、早くから教育して置かないと、後日に至つて決して取り返しが付かぬ。前の咄に付いても、孟母三遷の言傳は古いが、其意味は何日までも新らしい。幼時の教育の大切といふことは、つまりこの點にあるのである。支那人には支那人の氣風があり、英國人には英國人の氣風あり、日本人には日本人の氣風がある。又日本人の中にも武士には武士の氣風あり 商人には商人の氣風があるといふのは、皆子供の時から長く長く打ち込まれた結果である、ローマは一日では出來ない。

箕作文學博士の家庭

門下生

◎兄弟三人一族九人の博士

兄弟三人一族九人の博士とは實に珍らしいではありませんか、我が國はおろか、遠き西の國と雖もよもや其類はありますまい。こんな名譽ある一族はそも如何なる家庭から出たのでせうか、皆さんの知らんゝ欲する所でありませう。そして、その九人の博士と云ひますのは、博士は(元八文學博士を以下博士と呼びます)及び、菊地大麓(理學博士)箕作佳吉(理學博士)の三兄弟、故箕作麟祥(法學博士)、吳秀三(醫學博士)、石川千代松(理學博士)、長岡半太郎(理學博士)、美濃部達吉(法學博士)坪井正五郎(理學博士)の諸氏でありますこの中麟祥氏は死去されしも、他の八博士は世に在つてわが學界の重鎮となつてゐます。

◉名士の源泉

この名譽ある家庭の源泉は、箕作阮甫と云ふ作州津山の藩士であります。この人は蘭書を研究されて、通譯官又は醫を業とせられたとのことです

それから茲に一つ大書特筆すべきは、阮甫氏の相續人即ち博士の嚴父私坪氏のことであります。この人は阮甫氏の養子となつて箕作家を繼いだのですが教育家として、實に立派な人であつたのです。若き時數々外國へ留學し、歸朝後明治二年には日本橋區に三叉學舍と云ふ一大學舍を設けて、專ら教育に從事されました。晩年には高等師範學校を經營し、教育博物館長、帝國圖書館長となつて、終生教育の爲め全力を盡されました。

嚴父の教育法を博士に聞きましたから、その大体を述べて見ませう、嚴父は艱難、節儉自主獨立等の氣風を養成せんと昂められ、克己を以て其精神とせられた樣です。それで、自身の出勤にも諸

子の通學にもどんな、天氣でも車を用ゆるやうなことなく、衣服でも質粗であつて、子供などには一口と衣服のことは言はせなかつたさうであります、又獨立自尊と云ふ點から、子供には獨立して生活するだけの教育を施し、遺産を與へない主義を採られました、それから艱難は藥であると云ふことから、細少な金錢を小供に與へて旅行させ、可愛子には旅をさせよと云ふ諺を實行されたとのことです。

この樣に萬事に心深き嚴父は、學問上にも注意を怠らず、感ずべきものがあります。學生に施されし教育法はさておき、今博士等に教へられし一端を聞くに、所謂易より難に入り簡より繁に及ぼすてふ教育の原理に基さしやうです。初めより小六ケしき漢字を注入せず先づ百人一首英雄百人一首三体詩歴史等から始め、其歴史を授くるにも、序論總論の如きは後廻しとし、戰爭の記事の如き讀み易き興味ある所からせられたさうです。茲に面白きことは、學問を勉强さすのにある板に穴を開け、一度勉强せば一つ穴に目標を入れてその證となし又復習する時は紙よりを入れし筒から一本づゝ出してその證としたとの事。

◉博士の家庭

博士（文久二年生）の夫人は光子（明治九年生）として進十郎氏（前行政裁判所評定官）の娘で、夫人の分兄經太氏は工學博士であります（前の九博士と合すれば實に十博士となります）。博士に二男二女ありまして、長女綾（十二年）、長男秋吉（十一年）次女縫（九年）、次男豐三（四年）と言ふ配合のよい製造方であります。家庭に就て博士の理想とするがありますが、その理由と結果の不一致である時は社會に對して面目がなく、唯父の行はるゝ主義を眞似、その眞似すら實行出來ないことが多く、家庭に對する竟見は父の爲せることを述べただけで、御免蒙りたいと謙して語られません。只

その一部に就いて話された所を記しませう、

博士が克己主義なることは嚴父より傳はれる美風であつて、育兒上にこれを實行さるゝやうです言行一致は博士の最も昂めらるゝ所であつて、虛言する勿れとは子女へ對しての一大教訓であります。それで違約を以て最も不德とせられ躬行實踐以て範を示さんとせるやうであります。これ等の主義からして、儉約質素を尊ばれ、所謂ハイカラ的に華奢的に浮薄的に流れないやうに注意されます。

家庭の讀み物は嚴父と殆んど同主義でありまして、源平盛衰記のやうな興味あり圖畫ある軍記物を讀ましめ、小說は成るべくこれを却けられるそうです。又現今の國定小學讀本は餘り簡に失し中等學校になつてから俄かに高尙に傾ける感があるとて、教科書以外に長子に其氣のむいた時、自ら日本外史を授けられます、又術生上にも大に注意され、運動を奬勵し、諸子の登校は風雨に干はら寸徒歩させられます。そして餘り大切にし過ぎないやうに昂め、所謂寬嚴そのよろしきを得んとせるやうです、こは育兒上大切なことで多くの人は其愛に失する傾きがあります。親として子を愛するの情は万人等しく有する所でありますが、子を愛するの餘り、意志薄弱身体虛弱ならしむる例は少なくありませんから大に注意せねばなりません。

○男女死亡率

統計の示す所によれば生後十歲までは男子の死亡女子よりも多し、(即ち我國に於ては生後五歲までは千につき死亡男六四、〇三なるに子は五、七同じく六歲より十歲までは男六、一二女六、〇七なり)、是れ男子の牛育女子よりも難きに由る、又十一歲より四十五歲までは女子の死亡男子よりも多し是れ女子の姙娠年齡なると此の年次に於ては婦人に特有の疾病多きによれり、四十五歲以上は更に男子の死亡女子よりも多し、是れ男子の活力漸く凋落するもの多きに由るべしといふ

料理

◎椀　山かけもみのり

《原料》はんぺん三寸角位六枚、つくいも中一個、鰹魚煎汁汁用一升内いみりん二勺五夕、醤油こき品汁用三勺五夕しほ二匁、海草海苔二枚、

しんじよはかまぼこの肉の如くつくりて、いもをすりあわせて、つくりたるものなり　こゝには、手をはぶきて、有合せたる、はんぺんを用ひたる仕方をしるす、

○はんぺんを、四分内位のはゞに長く切ておくべし、次にかつをの煎汁をとりおきたるを冷してつくいもを、皮をむきて、おろしがねにて、おろしたるに、《いも中一つ》五勺ほど入れてすり合せ又醤油を一勺餘入れて、よくすり合せておくへし、さて、かつをだし、一升内鍋に入れて、よく煮たて、醤油を三勺五夕《初二勺入れて他の物を合せて味をこゝろみて後に二度ほどに入るゝなり、初より分量通りに入るゝべからず、これは醤油によりて、量のちがひあるゆゑなり》みりん二勺五夕、しほ二匁のかさにて、まづ醤油をうちばに入れ、其まゝかきめぐらさず煮立てゝ、次にみりんを入れ、鹽を入れ、めぐらして、味を見てから醤油をたしいるゝなり。

○右汁出來たらば、別の鍋に、切りおきたるはんぺんを入れて、汁を分てはんぺんをひたし椀にはんぺんをもりて、

○右のすりいもを、右の汁の上に二椀分位金杓子にてすくひ入れ《汁の煮たてたる上へなり》一分間ほどして、椀に入るゝなり、汁も共に入るゝなり、海苔をあぶりてあらき粉としたるを上よりかけて出すべし、

◎馬鈴薯のなつみかん皮和へ

馬鈴薯の成るべく大きなるを、皮をむき、たてに（長き方をたてとして）、三分くらゐの幅に切り、それを三分の角に（算木形）切り、湯鍋の中に入れてくづれぬほどにやわらかに湯煮し、笊にうちあげてしづくを切り置く、

なつみかんの皮は、表面のふつ〳〵としたる所をうすくむきとり、内側の白きところも庖丁にてそぎとり水に浸し置き（水に浸し置く事成るべく長きがよし）一夜くらゐ浸し置くべし、鍋に入れて水を加へて火にかけ、煮立ちて少したちて其湯をすて、新に水を入れて火にかけ、又水をとりかへ、かく三四度もとりかへてにがみを去り、やわらかにゆだりし時、菰にあげて水氣を切り、馬尾籠にてうらごしなし、其こしたるを鍋に入れ、砂糖、鹽、等を加へて火にかける木杓子にて煉り、鍋をおろし、前に湯煮したる馬鈴薯を入れ、くづさぬやう、箸にてしづかにかきまぜて皿に盛りて進むるなり。

◎胡瓜田樂

（原料）胡瓜七本、鹽、胡麻油、甘味噌、四十匁、白砂糖二十匁、味淋酒四勺、水四勺、山椒粉五分

○山椒味噌のこしらい方

甘味噌を、五十匁餘、摺鉢にてすりて、馬尾篩のうらにのせて、木杓子にて押こして、平たく押したり、杓子たてゝおしたり、（馬尾篩の目を筋違につかふべし）して、下に皿をうけたる中にこして、鍋に入れ、この時に味噌を計るべし、初め餘分に計りて、此時はかりてもよし）砂糖（四本ビキ）を合せ、みりん酒と水とを、加へて杓子にて加へなから能くかたまりなく合せて、かたまりなきやうにして炭火に鍋をかけて、ねるべし、（中火にて）ねりて、味噌のかたまりかくる時を程として、山椒の粉を加へて、ねり合せて、鍋をおろしおくべし、

山椒の粉は、干山椒のじゆくと實を去り、皮ば

かりを焙烙にてざつと炒りて、（こげぬほどに）皿にとり、茶わんの横つらなどにておして粉としてつかふなり、

よくは藥研にておろして粉として篩てつかふなれど藥研なき所にては、右の如くすべし、

○胡瓜のやき方

胡瓜（小の時は丸のまゝなり）三寸位なれば、まつ鹽をこすりつけて、水にて、洗ひて、いぼ〳〵の所をとりて、兩端の所を少しづゝ切おとし、上の方のみくる〳〵と、皮をむき去り、さて二つにたてに切りて、水にて洗ひて、金串に二本さして炭火の上に鐵橋をかけて、そこにのせかけて、あぶり、水氣のかわく時に、ふさ楊枝か刷毛にて胡麻の油をぬりてかへし、うらにもぬりて、又あぶりて二度ぬりて、次にやけ目つく時にみそを刷毛にてぬりて、少しあぶりて皿にとりて、くいくつもとりて、中皿につけわけてみそぬり添て進むるなり。

▲不潔なる雪　雪は一見甚だ美麗なる如くなれども其地上に落つるまでに種々の不潔物を混ずるを以て雪を溶解して之を分析するときは巨多の雜物を含む倫敦の如き繁なる場所に在りては殊に此雜物多く昨年の十二月二十六日の降雪を分析したるものに據れば實に左の如き雜物を含み居れり

アムモニア	〇、〇六七
有機アムモニア	〇、〇三九
クローリン	〇、八四〇
鹽分	一、四〇〇
硫酸	一、七三〇
固形物	五、六〇〇
タール	一、四〇〇

此中タール及びアムモニア等あるは煙突より噴出する煙の爲なりと云ふ

夏の雨後

アンドリュースノルトン作

孤蓬生譯

雨やみぬ。かなた濃き雲
やすらへる、眞珠の光。
雲、雲に、重なりて、妙なる姿。
青空はほの暗う。

地はたゞ、默によろこぶ
麗はしのすゞしさめぐみ。
喜びの遍ねきを領たんとてや、
八千草は葉を擴ぐ。

やは日かげ心ぶちゐで、
くし光白くそゝぎぬ。

涼し風、吹きそめて、
百香に息する。

濃き雲の重なる彼方、
氣の精靈しばし休らひ、
人の世を見下ろして、雲に浴し、
興ずとぞ思はるゝ。

浮雲被衣脱ぎすて
日輪の輝やき出でゝ、
野に原に濃綠の草樹皆がら、
きらめける露の玉。

○四季まぼろし

みどり色どる野に山に、
彌生の花は咲きみちて、
颯と吹きくる夕風に、
柳の月の影細く、
木々の梢も淡く濃く、
清くさえたる月の影、
見渡す限り白妙の、
ゐばなあさらん術もなく、

長閑に唄ふ鳥の聲、
狂ふ胡蝶も面白やっ
少女の袖をひるがへし、
蛙とび交ふ池の面。
紅葉色どる野に山に、
虫のなく音のことしげく。
雪に野山は包まれて、
枯の枝に鳴くからす。

る御苑

かくれた金貨

よし子

むかし西洋のある田舎に一人の御婆さんが住んで居ました此人はお爺さんも死に子供も一人もありませんので誠に〳〵淋しく其上御金もさう澤山はありませんので人を雇う事も出來すそれは心細い月日を送つて居りました。或日の事御婆さんはいつもの樣に獨りで御仕事して居りますと珍らしくもお客樣がお出でになりました、お婆さんは喜んで玄關へ出て見ますとそれは四五年前に隣りに住つて居たうちの娘さんでしたのです御婆さんは嬉しさうニコ〳〵して

「マアよく尋ねて來て下さいましたねさあ〳〵どうかこちらへいらして下さいお丶急にうちが賑やかになりてうれしい〳〵と」

獨り言も半分まぜて急いで自分のお座敷へ御案内しましたそして御仕事もいそいで片付け御菓子やコーヒーを持つて來て又ニコ〳〵と

「よく來て下さいましたね淋しくて仕方ない處でした

と繰返し〳〵言つて居ます娘さんも嬉しさうに

「御婆さん久しく御目にかゝりませんでした。御獨りで御淋しいでせうと思つて御尋ね致しました此からは時々御尋ねしていろ〳〵御話しませう」

といつて御婆さんの心を慰めましたそして其日は面白い御話をして夕方歸つて行きましたがそれからは時々來て御婆さんの御手傳したり公園へ連れて行つてあげたりして大層頼りない此御婆さんを大事にして上げて居ましたそれで御婆さんも大變りゝーさんを可愛がり人形の洋服など縫つてやつて居ました其内にもをクリスマスの日が近くなりましたので何かリゝーさんの喜びさうの物をあげたいといろ〳〵考へましたが御金がないので何もいゝ物を買う事も出來ませんものですから或日の事物置へいつて方々さがして居りますとカバンの底から小さな奇麗な箱が出て來ました。その中に自分で金の切で針箱を縫ひ赤い絹糸と小さな鋏とを入れ指貫と針を買つて來てそれも入れ可愛いらしい針箱を一つこしらへました。

其内にいよ〳〵クリスマスが來ましたけふはきつと早くからリゝーさんが來るだらうと御婆さんは學校から歸つて來る子を待つ親のやうに玄關へ行つたり來たりし又門へ出て見たり窓から首を出したりして待つて居ますとやがて向ふの方から海老茶の洋服を着同し色の帽子を冠つて急ぎ足で御婆さんの御宅の方を見ながらリゝーさんが來ました。

駈け出して門迄迎いにいつた御婆さんと手を引かれておうちへ入りましたリゝーさんはお婆さんにあたゝかな毛糸で手袋をこしらへて持て來て上げ

ましたそして

「御婆さん之から寒くなりますから之をはめていらつしやい又靴下もあんで來て上げませう」

と云ひますので御婆さんは大喜び

「之は〳〵いゝ物をあんて下さつて有難い事」

と大喜びですそうして

「リヽーさん之はあたしがこしらいた針道具ですよ」

と云つて針箱を持て來て上げました。

リヽーさんはいかにもうれしさうに戴いて早速中の物を拜見しました。

先つ鋏を出し糸をなかめ針指を出して猶見ますとまだ何か一枚の奇麗な切かありますリヽーはそーつと摘み出して

「お婆さん之は何てすの」

と云つてお婆さんに見せましたそこてお婆さんはリヽーと二人其切を見ますとストーブの繪か書てあり其そばに

「よく見ると分る」

と書いてあります何か何やら一向わけか分らないので二人は不思議に思ひいろ〳〵考へて居ましたか急にリヽーは

「お婆さん之は御隣り座敷のストーブに能く似て居ますよいつてくらべて見ませう

と云ひますからお婆さんも

「そうねそう云へば此床飾りが市松になつて居る處などそつくりの樣だからどれ見ませう

そこて二人は隣座敷に行きくらべて見ますと一寸の達ひもなくそつくりてすリヽーは暫く考へて居ました急に思ひ出した樣に床飾りの市松の一つゞヽを指てつヽついて見て居ます二つ三つとだん々々行きますと中に一つ動くのがありますのでも一度強くつきましたらはづれて下に落ちこな〳〵にかけてしまいました

リヽーはびつくりして

「お婆さんつひあんまり強く押したもので落し

てこわしましたよ、ご免なさいな、ねどーか」

としきりにあやまります

お婆さんは可愛いリヽーがつひした事故少しも怒るどころか反つてやさしく

「つひですものちつとも心配する事はありませんあとで作らせませうそれよりリヽーさんや其中に何かはいつて居るやうに見えるかさがして御覽なさいな

と云はれてリヽーはお婆さんの優しいのを嬉しく

「はい何かあるやうですねとこは〳〵手を入れて見ますと何か袋が出て來ました」

あんまりそーつと持ち出したので重い〳〵袋は床の上に落ち口が破れて中からピカ〳〵する金貨がばら〳〵と出ました

お婆さん驚くまい事か腰が抜けたやうに後の椅子にたほれ掛り

「マア〳〵」

と目を丸くして見て居る許りです

リヽーはそれを一生懸命獨りで拾いあつめ

お婆さんの膝へのせてあげ又ストーブの飾をよく〳〵見ますとどれも〳〵も皆戸棚になつて居るやうですから片はじから押してははづしして行きましたら皆戸があき中から一つ宛の袋が出ましたそれをびつくりして見て居る

お婆さんの前へ持て行き一つ〳〵あけましたらどれからも〳〵同しやふに金貨が出ますので見る々々中に机の上山盛りの金貨になりましたお婆さんも漸く夢がさめた樣に喜び

「りヽさんやまあ何と嬉しいぢやありませんかさあどこかヽ早くしまいませうあなたの巾着へも入れてあげやう」と

云つてリヽーの巾着にも一ぱい分けてやり近處の貧しい可愛そなう子供にも一つ二つ分けて惠みあとは大事に金箱にしまひました。

リヽーも大層喜び

「お婆さん之はきつとお爺さんが溜めて御置に

なつたに違いありませんこれからお婆さんも人でも雇つて賑やかに暮していらつしやれますね、私こんな嬉しい安心した事はありませんよ、ほんとーによどざんしたね

お婆さん

と人事のやうでなく喜びました

お婆さんは御金持ちになつたのも嬉しいのですけれどこれよりかリヽーの親切を優しい心が何よりうれしく

「之もリヽーさんが尋ねて來て下さつたから此箱も見出したのであなたは此御金よりも私に大事な人なのですよ」

と之もいうにも嬉しそうに兩人ともニコ〳〵して其一日をたのしく過しました

それからお婆さんはリヽーさんのうちに行き其御話をくはしくしてリヽーさんを自分の子供にはしいと頼みましたリヽーもお婆さんが獨りて心細いのを氣の毒に思ひ喜んで子供になりましたのでお婆さんはリヽーを都の學校に入れそれからは安心してたのしく暮しましたとさ。

豆と石

乙　女

豆「わーいヽ時候になつて來た、是から僕の大きくなる時節だドレソロ〳〵支度をしようかな」

と大きな石のそばの土の上に落ちて居た豌豆が獨り言を云ふと之を聞き付けた大石は怪げんな顔をして

石「大きくなる？大きくなるつて何なことだへ」

と聞きますと

豆「大きくなるつて、知らないの？それはね、君と僕と君の方が大きいだらう、そこで僕が今段々大きくなつて君よりもつと勢の高いものになると云ふことなのさ。」

石「なに僕よりも大きくなる？、生意氣なこと

を云つて居るね、僕などは三十年から茲に斯うやつて居るけれど、ちつとも大きくなりはしない、お前などいくら一生懸命になつたつて吾輩などより大きくなれるもんか馬鹿なッ」

と云ふトタンにポッと云ふ音がしたので

石「オヤ何だへ今の音は」

豆「僕だよ驚くにや當らないじやないか、今僕が大きくなり掛けたのだね、是れ見て呉れ給へ」

と云ふのを見ると

石「オヤ〳〵〳〵可哀相に小ぼけな癖に意張り散らすものだから腹が破けたではないか」

豆「ナニ腹が破けた？虚、是は腹ではないよ、僕の外套だよ最う暖かいから外套は入らないからね脱いだのさ是れから僕が大きくなるのだから見て居給へ」と云ひながら豆は外套の中から出した小さな頭を見る間に段々と伸ばして來て二枚の葉を出しました。

石「オヤ〳〵また變なものを出したねそれは何だへ」

豆「是か？是は葉と云ふものさ是で息をするのさ

石「息？呼吸つて何さ、僕なんぞしたことがないよ」

豆「そーだらう、君は生きものぢやないもの、僕達は生きものだからね、呼吸をしなければ生きて居られないからね。」と云ひながらドシ〳〵大きくなつて葉は澤山に出て來る蔓は長くなつて石の旁にあつた杉の木にはひ上つて遂々枝に迄からみ就いた。そして赤い蝶々の樣な花を澤山咲かせて然も心地よけに涼風に吹かれて居る、之を見た石は

石「ヤアー、立派になつたな、何うだらう此高くなつたこーは一丈位もありそをだ。アンナ小さな豆が斯んなに大きくなり、そうしてこんなきれいな花を咲かすとは何と云ふ不思議なをだらう」と云つて感心して居ました。

名家の口

●習慣の直し方（甲賀藤子）

恥かしがる子には始めからむりにさせずにたゞ恥かしさをとりちる方法を考へなければなりませず、すねる方の子供には、始めから、如何してもさせなければなりません、そのはづかしさを取り去る方法で御座いますが、私共の幼稚園にも大變内氣な子供が御座いまして、どうしてもみなと一緒に名をよびました時返事をいたしません。又遊戯の手まねも致しません。又、お辨當を決して喰べた事がないので御ざいます。それで私はある時非常に面白い遊びを皆にさせましてとうしてもまねずにはいられない樣に致しました。ところがその子もとう〳〵興にのつて自分を忘れて騒ぎだしましたのでした。その折をはつざず「何子さん」と呼びましたところが「はい」と我れしらず快活に返事をいたしました。その時私は「おえらいよくお返事が出來ました」といつて、大變褒めました。翌日に又この遊びをさせて返事をさせましたが、この二日間でまへの習慣はすつかりやぶれて、三日めからはいつでもなんでも、なくよくお返事をする樣になりました。從つて遊戯も皆と一緒に面白くする樣になりました。▲今一人はすねて返事をしない子供がありました。或る日遊戯室にはいりますと、すぐ私は「今日は皆さん、御返事をして下さい、御返事が出來るのに、なさらない方がありますと、こゝにあとへ一人殘しておきませう」と申しました。所がやはりその子は例の通り返事をいたしませんでした。やがて時間がすみますと、あとの子供は皆外へ出でゝ遊ばせますが、その子だけは可憐そうでしたけれども一人殘しておきました。子供はあとで泣き出しました。で、その時親切にいつて聞かせまして、少し泣きやんでから、お返事をさせて見て「この次から、もし御返事をなさらない時は、いつでも、こうしますと」申しまして、それから皆の先生の方へつれていつて、今日ははじめてお返事が出來ましたといふて皆さんにほめて頂きました。それから一度もすねる樣な變な樣子は見えなくなりました。（家庭週報百〇五號）

●女子と高等教育（鎌田榮吉）

婦人と雖も男子と同樣の學問を授けたならば、男子と同樣に豪い人間が出來るに相違ないと思ふ、併し今日では格別女で立派な學者が出て居ないが、これは西洋に於ても婦人に教育を施すやうになつてから日か尚ほ淺いから、教育を受けた全體の數が少いからである、假令一歩を讓つて男子と同等までに達し得る力がないまでも婦人は婦人として達し得る程度までは達し得ることに勉めねばならぬ、これは婦人としての義務であると同時に、文明國として國家の盡すべき義務でもある、專門學に婦人が加入することが出來ない國は、跛足の國であると云はねばならぬ、また學問を研究する方面から云ふても、男性の見たる方面と女性の見たる方面とは自から其趣か異なり、男性の觀察力の屆かぬ處を女性の力に依つて發見することがあるかも知れない、そこで益々女性學術研究が必要になる、國としても多方面よりの研究者を出すことが必要で、婦人にも婦人としての力を最高度まで引き伸し得るだけの餘地を、國としても與へなくてはならぬ。（新婦人）

◎女子と信仰

（井上哲太郎）

女子は智的といふよりも寧ろ情的のものであります。どちらかといふと感情の方が兎角勝つて居る所からして、一たび何か宗教を信ずるといふと、餘程深くそれに耽るといふ傾きがあります、宗教上の說教を聽いてとそれを感ずることが男子よりも甚だしいものと思はれるのであります。一に女子はマア纖弱き性質の者でありますからして、どうも何か依賴する所が無くては居られぬといふやうな者であります。固よりさうで無いやうな女丈夫の如き者もないてはなけれ共、一般に言ひまするとマアさう云ふ性質の者が多數を占めて居るのであります。そこで精神上確かにたよりになる樣な信仰が必要となつて參りまするので宗教などの教理を聽いて悟りまする間に、自から精神のたよりを得るといふ樣なことで、深く信仰に傾き易い所があるものであります。

次にどうも女子は懷疑心が比較的に少い樣であります。如何にも尤らしき佛教の教訓を聽けばそれに傾き、又基督教の教訓を聽けばそれに傾くといふ樣な工合に、兎角宗教を信ずる事が男子よりも早くもあり又厚くもある樣に考へられます。固より男子と雖も宗教を信ずる者も少く無いとは、是は云ふまでも無い事でありまするが、併しどうも女子は殊に信者としては忠實なる者の樣に見受けらるゝのであります。又彼老婆を見まするといふとお寺參りなどをして早く極樂淨土に往生したいなどゝいふ樣な考で餘命を送つて居ります。どうもそれらは或は疾くに夫を喪て獨身であるとか、或はそれで無くても段々年取つて心寂しくして何か一つの精神上賴みとなる者を得やうとして居るのでありまして、どうしてもさう云ふ者には佛教なり何なり、一の宗教は無くてはならぬのでありませう。それで女子に取つては信仰てふ事がなか〳〵重大なる事件となつて來る次第であります。

所が斯かる重大なる事件とも見る可き信仰が實際上に利害の關係が無いといふ樣なことは決して無いのであります。殊に母たる者も信仰といふものが子供の養育にナカ〳〵大なる關係を及ぼして來るものであります、母たる者が何か厚き宗教上の信仰がありますれば、それは必ず形の上に現はれて來る所からして子供も自然それを見習ふのでありまして、何時となく子供の精神上にその影響は及ぶものであります、例へは佛壇なり神棚なり一家の中にありますれば、それは其家庭中に於ける神聖なる中心點をなして居るものでありまして、さう云ふ物の有るといふことが子供に一種のインプレッショジを與へることは當然であります。さうして母親か神佛に對して信仰を發表しますれば之を見習つて子供は左の如き念を生するでありませう。

第一には敬虔の念であります。即ち神佛といふ樣な人間以上の無形の者に對する敬虔の念を生して自からそこに一種の謹慎なる情態か得らるゝのであります。

第二に神聖の念といふものか何時となく涵養し得らるゝでありませう、この有形の物を超脫して無形の精神界に於て一種の靈的のものを想像して、之を崇拜するといふ所に神聖の念か起らないといふことは無いのであります。（日本婦人）

●御注文の節は(婦人と子供)を見たる旨御附記を乞ふ●

心理學の王冠

大好評嘖々再版發賣

心理學綱要

東京帝國大學文科大學教授 文學博士 元良勇次郎先生新著

洋裝菊判全一册
紙數凡三百餘頁
定價凡金一圓
郵稅金十錢

心理學上に於ける博士の位置は世既に定評あり。爰に喋々を要せず、本書は、博士が、彼の宏大深甚の學殖を提げて、昨年更に歐米諸洲を漫遊し齎らされたる泰西名家の學說と、博士が多年造詣せる新研究とを悉く網羅されたる大著なり、行文頗る平易にして簡明、世の心理學に通曉せんと欲する士及び教育文學宗教界に立つの士は必ず本書無かる可からざる也。

文章平易

發行所 東京神田猿樂町貳番地 弘道館

●御注文の節は(婦人と子供)を見たる旨御附記を乞ふ●

東京高等師範學校教授
東京帝國大學助教授　文學士　保科孝一先生著

言語學講話

大修正第三版發賣

（購求者は修正の版に注意せよ）

國語教育の發達を促し國語問題の解決を速ならしめんには言語學の普及を以て要諦とすべきや論を俟たず保科先生特に茲に見るところあり本書を著して言語の一斑を平易に且つ懇切に說明せらる中等教育に從事せらるゝ諸君は勿論言語に關する原理を學んで斯の道に貢献するところあらんとせらるゝ諸君は教科書又參考書として缺くべからざる良書なり殊に今や三たび版を改むるに當り丁寧に增補修正を加へられたれば一層得る處あるべし

洋裝菊判總クロース
全一冊正價八十五錢
郵稅金八錢

文學士　遠藤隆吉先生新著（大好評嘖々）

虛無恬談主義

菊判形全一冊
正價金四拾錢

本書は處世法上の心得なり。政治家官吏商工業家等凡て多くの人を對手にする者の必讀の書たり。大政治家たり大事業家たり、大教育家たらんとするものは必ず、此心得なかる可からず、虛無恬談主義の創設者たる老子は支那に在りては一小吏に過ぎず、而かも其名孔子と竝びて盛んなり而して虛無恬談主義は貴人の學なりと稱せらる實に之を學はば貴人たり大人物たるを得るなり本書は無能の無能爲の爲を主張する者にして尨然たる大政治家大日大効名をなすの素地を作すを得べきなり。

發兌　東京市猿樂町二番地　弘道館

●御注文の節は(婦人と子供)を見たる旨御附記を乞ふ●

序

文學博士 井上哲次郎先生　　文學博士 井上圓了先生

文學博士 元良勇次郎先生　　文學博士 女學部長 田下歌子先生

西山愁治先生編

中村不折畫伯の家庭團欒の三色版口繪挿畫
四六判洋裝函入頗る美本紙數七百六十餘頁舶來上等紙

正價一圓三十錢　**特價九拾錢**　郵税十五錢

家庭 末代の寶典

家庭問題は今に殘されたる社會問題として又戰捷後必然に社會の要求する時代急務の聲に應ぜんとて世に出づる家庭向の著書敢て尠きにあらず尠からずと雖も惜むべし一時的際物の零片を充たさる即ち編者此に周到の用意多大の苦心抱負を以て本書を編纂せられたれば家庭は此れに依て光明に浴し新しき福音に接するもの尠からざるを信ず幸に世の流行的一夜作の駄編と同一視する勿れ本書の内容は

家庭組織	道德	宗教	經濟
結婚制度	交際	衛生	行事
法律	禮式	家具	料理
裁縫	園藝	茶道	教育
洗濯	汚點拔	生養	畜音
樂工藝	品花	遊戯	交通

最も家庭に必要なる粹を拔きて千餘項を選擇し五十音順に配列し説明懇切苟くも事に就て家庭に關して細大漏さず以て忠實なる家庭の顧問たるを期せり即ち本書を家庭必備の寶典として一般の家庭に獻じ進物殊に結婚出産の贈物として薦め又教育に熱心なる各學校教育家及び學生諸君の備品として推す幸に此の好機を逸せず購讀ノ榮を賜はらんことを購讀者に注意

本書下題に類似の者有之購求者は西山愁治編者

發行所 弘道館に注意

發行所 東京神田猿樂町二番地 弘道館 電話本局二八四〇

發賣所 各地書店

（婦人と子ども第七卷第八號）
明治三十四年一月廿八日第三種郵便物認可　（毎月一回五日發行）

フレーベル會發行

幼稚園遊戯

定價　四拾錢
會員特價參拾錢　郵税四錢

幼稚園の爲めに編纂され幼稚園の爲めに出版されたものは本書が始めてゞあります。世の幼稚園に關係せらるゝ方々は是非一本を産右に備へられんことを望みます。

尙本書には女子高等師範學校内にて作られた幼兒用唱歌の歌曲並に同校附屬幼稚園に於て現今採用せらるゝ保育要項とを附錄として採錄致しました。

フレーベル會發行

幼兒教育談話材料

定價金四十錢
會員特價參拾錢　郵税四錢

世に行はれて居る多くのお伽話は幼兒教育に不適當なものであります。本書の内容は特に幼兒の爲めに作られたもので幼稚園時代の幼兒に最も適當なものを集めてあります。家庭間の贈物などには最も妙なるのみならず、苟も幼兒教育に關係して居る方は是を標準として作話せられんことを希望致します。

明治四十年八月一日印刷
明治四十年八月五日發行
發行兼編輯者　辻本卯藏
印刷者　日下主計
發行所　女子高等師範學校内　フレーベル會